裏返しにして、表の布を上に疊み十六枚を一番下の綿を七寸程蒲團地より大きく重ね、次ぎ〳〵に二寸位小さしくて十六枚重ね、無駄の出ましたので、四角のまわりへ眞を入れ、四方を折り返へしして角の處は斜に切て一枚づゝ入違ひに重ねて、殘して置ゐた四枚の内二枚を廻りを折返へして中央の薄い處へ平に置き、後の二枚は掛綿にして四角を折り、三尺の裏の穴から表へ返へします。

方き置の綿

5、絎け方と仕上げ

裏の縫ひ殘して有る處を絎けて、木綿なら木綿糸絹なれば絹糸にて綴ぢを致します。

括り枕

蒲團につき物の括り枕は、誰君もよく御存じと思ひますから、ざっとお話申上げます。

1、用布　丈　巾　一尺四寸

2、地質

3、縫方

表を中に二つ折りにして合縫にして隱縫をかけますと、筒の樣になりますから、片方を先きに桔梗に括り、眞には金巾を入れて、ソバ殼八升位を入れます。（直徑五分位の棒で突き乍ら入れますとよく入ります）充分入りましたら、他の一片を前のと同じく桔梗に括ります。此の仕方は小物の方の紐の處に御座いますから、その通りにします。

搔卷

搔巻は表も用布一反裏一反半を用ひ、夜具より總丈も袖丈も裏の出で吹き小くなりますが、縫ひ方は前號の夜具と少しも變りません。それ故裁ち方だけを述べて置きます。

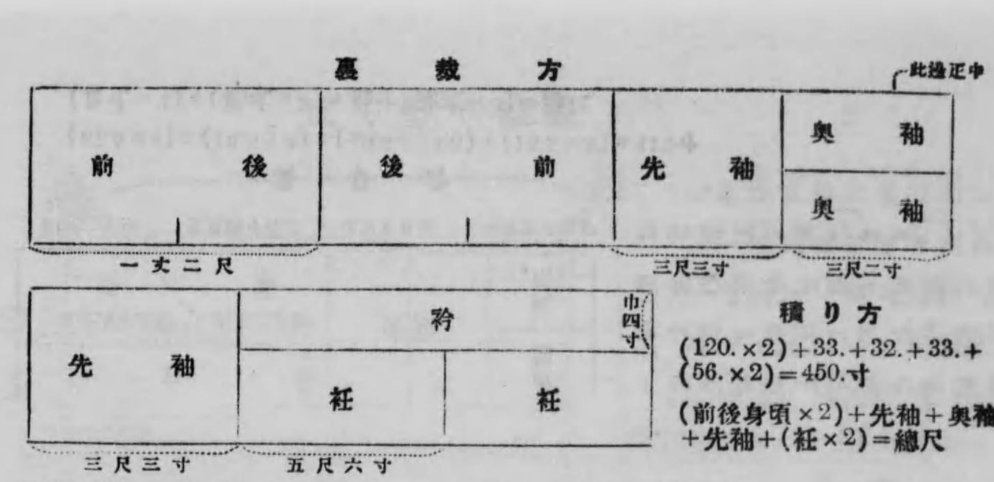
1、縮緬及び羽二重搔巻の裁方

（用布表三丈六寸、裏四丈五尺一反半）

裏裁方

(16.5×4)＋(82.5×2)＋(37.5×2)＝306寸
(袖丈×4)＋(前後身頃×2)＋(袵丈×2)＝總尺 …… 積り方

表裁方



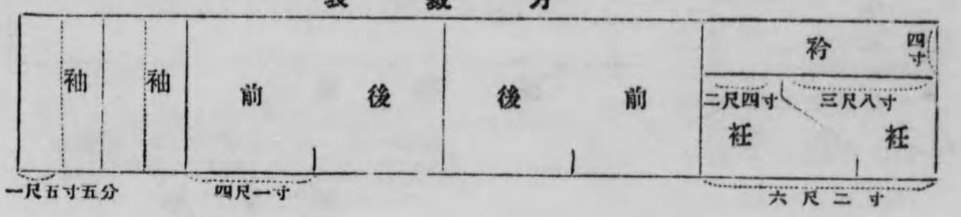
積り方

(120.×2)＋33.＋32.＋33.＋(56.×2)＝450.寸

(前後身頃×2)＋先袖＋奥袖＋先袖＋(袵×2)＝總尺

2、本綿物搔巻の裁方（用布表一反裏一反半）

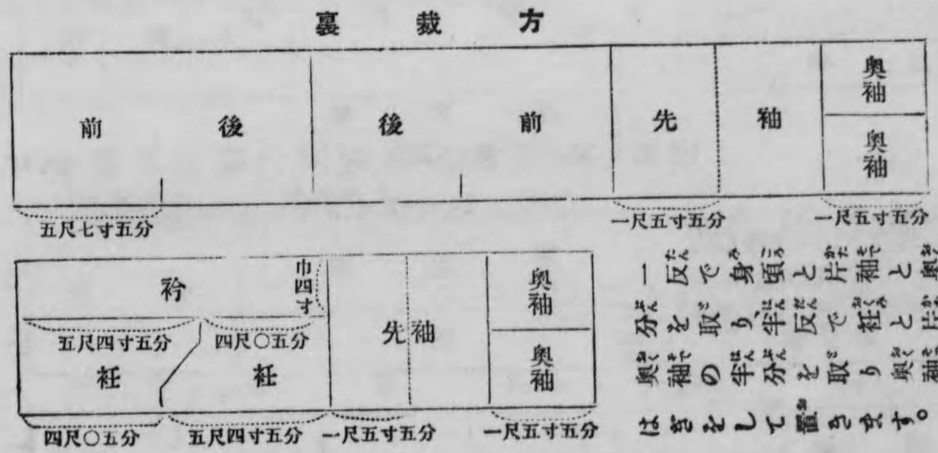
裏裁方



積り方

(15.5×4)＋(41×4)＋62.＝288寸
(袖丈×4)＋(身丈×4)＋衽＝總尺

裏裁方

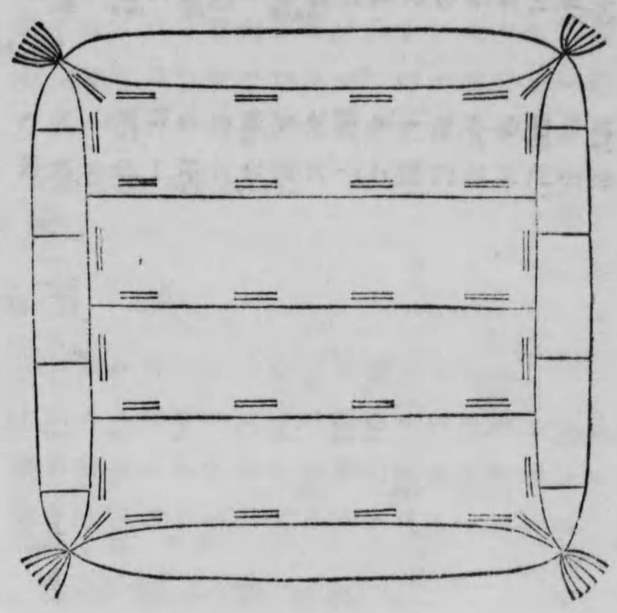


奥袖の半分を取り、半反で衽と片袖とは山おとして置きます。

積り方

(57.5×4)＋(15.5×3)＋(40.5＋54.5)＋(15.5×3)＝418寸
(身丈×4)＋(袖丈×3)＋衽＋(袖丈×3)＝總尺

圖り上來出



八つ吹き蒲團

八ツ吹蒲團

皆四角形に揚げます。此の八つ吹き蒲團は前章の鏡蒲團と同様に出來上がり圖の如く四角に縫ひ返へりの四角を眞四角に返へります。鏡蒲團は吹き方に裏を一寸八分づゝ表に裏を五布にして表を四布に掛け蒲團に用ひます。表に袖に裏に袖に裏を五布にして表を四布に掛け蒲團に用ひます。

一、裁方及び積り方

裁方は別に申上る程のことは有りません。表用布一丈四尺六寸を五等分に裁切りますと、一布が三尺六寸五分づゝに成ります。裏用布は二丈一尺八寸五分を五布に裁切りますと、一布の長さが四尺三寸七分づゝになりますから、すぐ縫方にかゝります。

二、縫方

1、表

四布を巾一杯に合縫にして、同じ方に折をかけて置きます。縮緬又はメリンス類はぐし縫をかけますが、外の物は其儘に置きます。

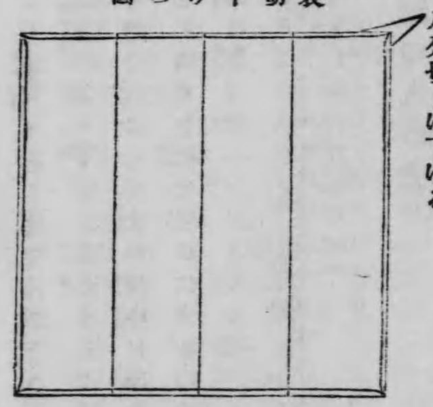
2、裏

五布を表と同じく合縫にするのですが、真中の縫目は上下一尺四五寸はかり縫ひ殘りは明けて置きます。此所から綿を返すためです。

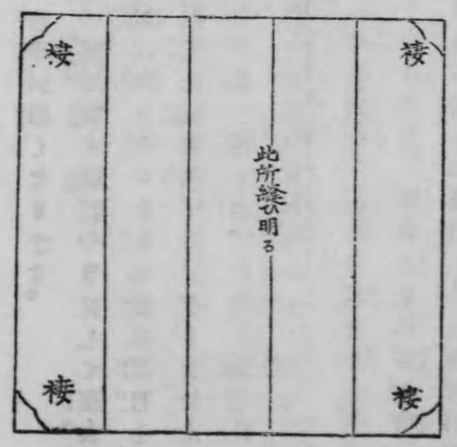
3、裏表合せ方

四角に八つの褄を揚げるのですから先づ表に圖の如く八分の切り下げをしなければなりません。裏も圖の如く褄形通りに縫ひ込みを切り捨てます。尤も裏の方は角の所に一つ切込を入れ殘りは縫ひ込んで置い

表切下げの圖



裏の角裁落しの圖



ても差支へありませんが、どうしても手際が惡くなります。

裏表の切り下げが出來ましたら前章の鏡蒲團と同じやうにして裏表とも四つ折にして丈の眞中に印をつけ、縦は印と印とを合せ横は耳目を合せて四方を合せ縫ひにするのですが、四角は褄を揚げねばなりません。褄は表の切り下げと裏の褄形とを合せ普通の褄を揚げるのと同じにすればよいのです。表裏縫ひ合はさつたらば折りを表布の方へ返して隧朕をかけて置きます。

4、綿の入れ方

裏を外側に出し表布を上にして据へ、其の上に綿を入れます。綿は大抵大判綿入百匁入れます。入れ方は鏡蒲團と同じく、一番下の綿を七寸ばかり蒲團布より大きく四方に出し、其の次に重ねる綿は前より二寸位小さくします。そして最初綿を縦に入れましたら次ぎは横に入れると云ふ工合に入れ違ひにして行きます。四方の出吹きへは二重通り眞を入れて折り返し褄の所は丸くして置き、前に縫ひ殘した裏布の穴から表へ返します。

5、絎け方と、とぢ

裏の縫ひ殘しの穴を絎け、出來上り圖にある通りに縫目〳〵を綴ぢればよいのです。四角の總は二十本ばかりにします。綴ぢ糸は以前は青い色に限られて居たかのやうでしたが、近來は裏布と同色の糸を用ひます。そして用布が絹布ならば綴ぢ糸も無論絹糸を用ひます。

飾り夜具

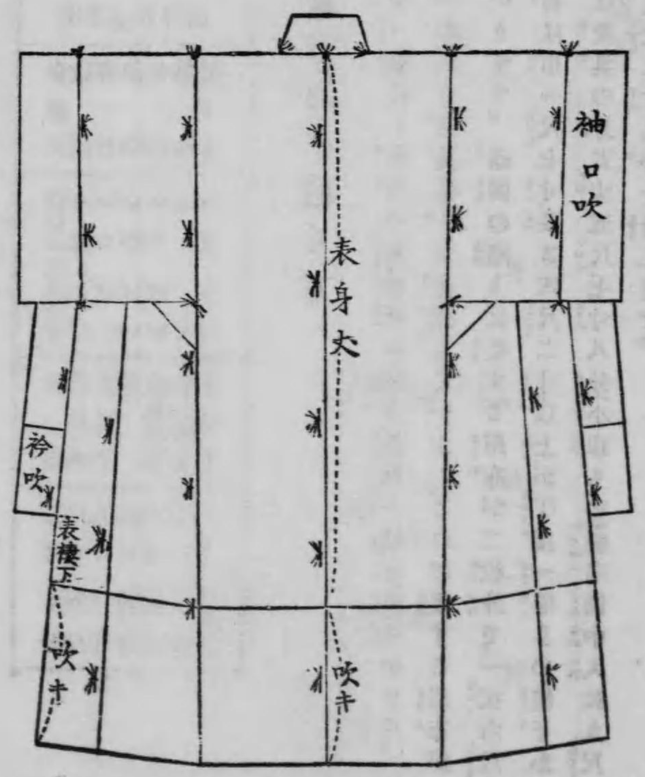
飾り夜具は婚禮の節に飾る夜具でして、實用と云ふよりは裝飾を主としたものであります。夜具、兩面打扳きの鏡蒲團二枚（上を鏡蒲團として下敷は普通の三布蒲團を用ゆることもあります）飾り枕を添へて一組となるので、二組揃へて一對になるのです。

飾り枕も本式のものは長枕として、長さ三尺五寸、直徑五寸五分の太さに造りますが、現今は大抵略式の半枕を用ひる方が多いようですから、兩樣のお話をいたして置きます。

夜具の表と、鏡蒲團の廻りと、長枕とは皆一樣の地質で造り、正式は錦、純子、繻珍などを、略式には縮緬に模樣又は定紋散しなどを染め出して用ひます。裏は多く羽二重を使ひます。鏡の中の地質は、夜具の裏と同色の縮緬を、もし上敷を鏡となし、下敷の變りたる場合は、下敷は鏡の中と同じ品を用ひます。

先づ最初夜具から申上げます。

飾り夜具出來上り圖

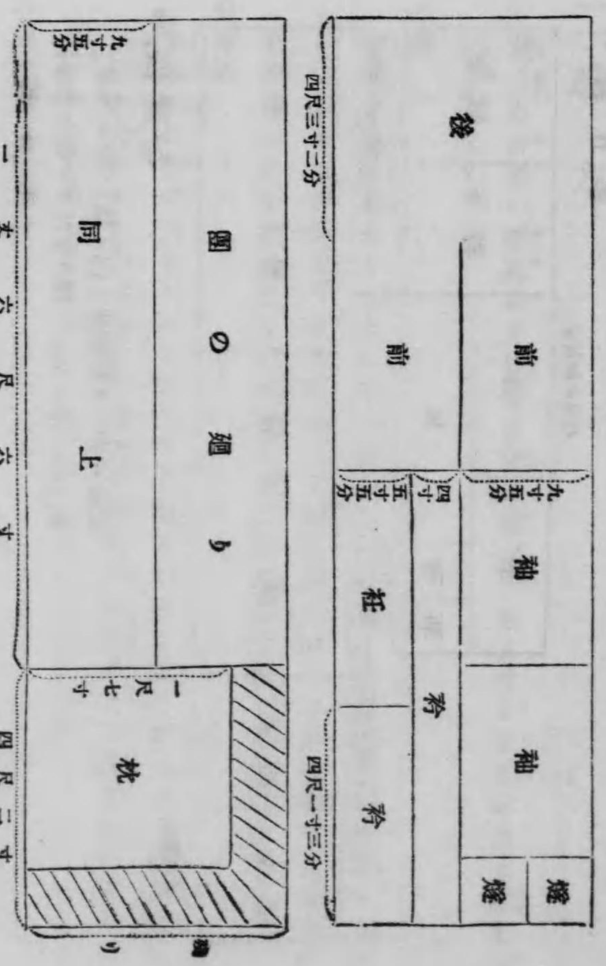


出來上り寸法	
袖表丈	四尺二寸五分
肩行巾	一尺九寸
後巾	いつばいい
前巾	いつばいい
袖下巾	四寸五分
衿表	三寸五分
燧肩巾	三寸五分
衿先吹き	五寸四分
袖口吹き	六寸五分
裾吹き	半巾
	一尺二寸五分

一、裁方及び積り方

純子一卷にて夜具の表、蒲團の廻り、長枕一組を裁合せます。純子は大巾物ですから、夜具は一つ身裁ちといたし、これに要する用布が一丈六尺九寸いります。蒲團の廻りに要する用布が二枚分で一丈六尺六寸。枕の用布は巾一尺七寸、長さ四尺二寸、以上が丁度一卷きの純子から取れます。裏は夜具の分五丈五尺七寸八分(小巾もの)鏡蒲團中入に九尺五寸、合計六丈五尺二寸八分を要します。

1、表裁方

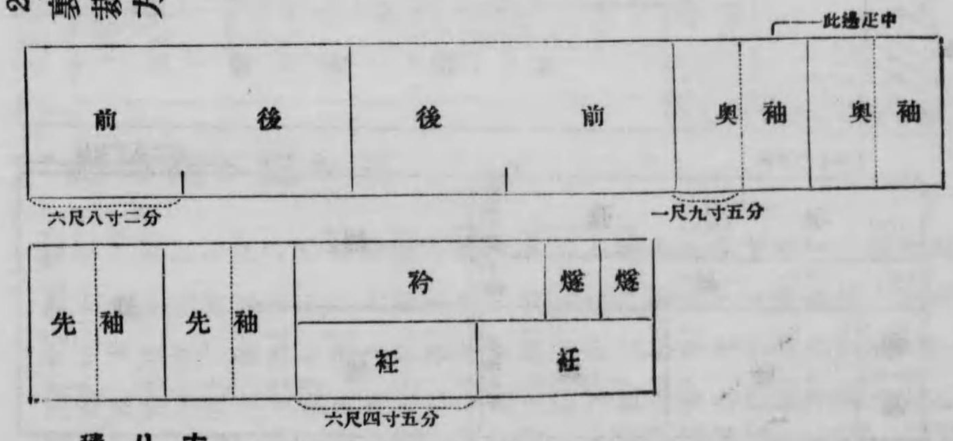


積り方

(43.2×2)＋(41.3×2)＋166.＋42.＝377寸

(身丈×2)＋(衽×2)＋滿團廻り＋枕＝總尺

2、裏裁方



積り方

(68.2×4)＋(19.5×8)＋(64.5×2)＝557寸8

(身丈×4)＋(袖丈×8)＋(衽×2)＝總　尺

ハ　縫附けと袖附け

イ　袖　表袖と裏先袖とを合せて袖口明きを合せ縫ひにし折を表の方へ返しかく裏袖へかけて縫ひます。奥袖も燧だけ殘して袖下を縫ひます。次に袖下を燧を縫ひ附けるだけ殘して表袖から袖口へかけ縫ひます。

ロ　身頃　表身頃の背縫ひをしたら衽をつけて脇を縫ひます。裏も表と同様に縫ひしたら三分の縫代で裾を合せ表の方へ折をかけてかくし躾をかけて置きます。

袖も普通の絹夜具と同じで前に述べてありますからざつと申し上げて置きます。

二、縫方

縫附は前に述べました普通の夜具と少しも異りませんから略します。

燧の裂を丈の裁目を後身に、前身へは堅地に三角に縫ひ附け、殘つた二方の三角を袖下に、燧の堅地が後袖に、横地の裁目が前袖になるやうに縫ひ附け、折は皆袖と身頃へかけます。袖附けは身頃から折縫ひにつけます。

二衿

出來上り圖にある如く、表衿下へ裏衿が吹き、從つて衿先きの縫目はなくなるのでありますから、先づ始めに表衿と裏衿とをはぎ合せ、衿山と背山とを合せて上前下前とも衿をつけ下し、衿先き附根で一針きつかりと止めて、すぐ裏身頃へ裏衿を附けます。衿先から一尺程は、裏衿巾と表衿巾とを縫ひ合せ、衿の方へ折をかけて置きます。殘りは綿を返す時のために明けて置きます。

ホ綿入れ方

綿の入れ方は普通の夜具と殆んど異りませんから略します。分量は一切で二貫五百匁入れまして、袖へ八枚、身頃へ拾七枚と云ふやふな割合にします。身頃は全體に五枚通り入れ、腰から背へかけて六枚入れます。

ハ衿けり方及びとぢ

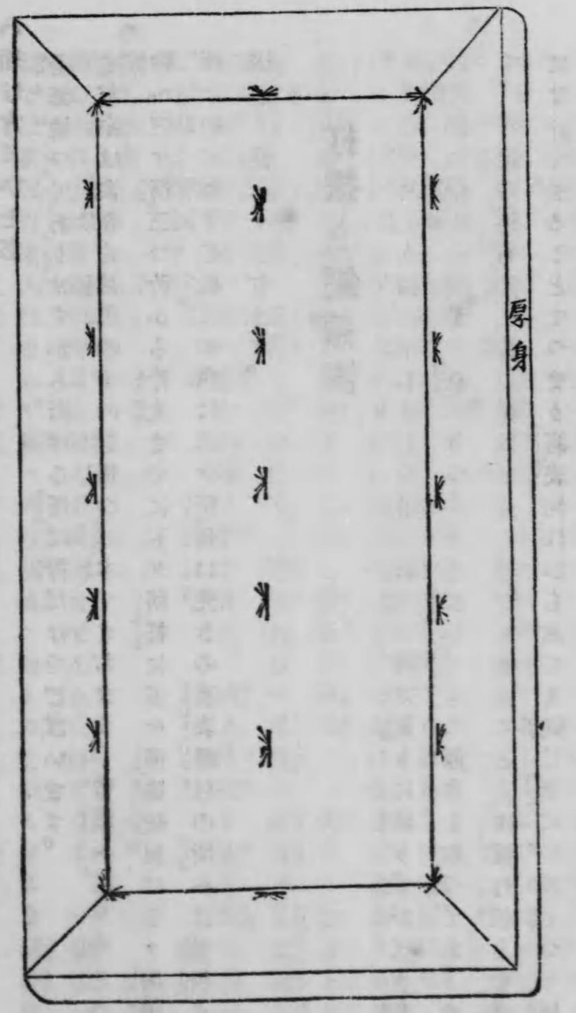
全部縫つてありますから、衿けける所は衿だけでございます。

とぢ糸は表布と共色のものを用ひ、八本でとぢます。背筋へ五ヶ所、三つ衿へ三ヶ所、三つ衿から衿先までに五ヶ所、衽に五ヶ所、脇縫目に三ヶ所、袖附け山と袖下と、袖丈の内に二ヶ所、袖口先きの裏表縫目の所へは、袖附と同じく衿へてとぢます。

打拔き鏡蒲團

次ぎの出來上り圖に示しました通り、表布の四方廻りに廻り裂が吹き、角が單衣の褄先と同じく斜にきつかりと合ひ、一寸の厚身を取つてあります。普通の鏡蒲團と違ふ點は、厚身の取つてあることと、兩面打拔きの鏡になつて居ることで、つまり裏表何れから見ても同じ形に出來上つて居るのであります。

鏡蒲團出來上り圖



四角なものですから別に裁方も積り方も申し上げる程のことはありません。出來上り寸法に縫代を加へて裁てばよろしいです。篤附も無論ありませんから、すぐ縫ひ方を申し上げます。

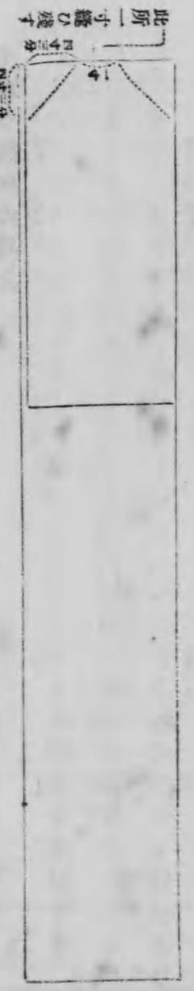
出來上り寸法	
鏡の丈	四尺六寸
鏡の巾	一尺八寸
廻り吹	四寸五分づゝ
厚身	一寸

一、縫方

イ廻り四角の縫方

鏡の裂は大巾物ですから其儘にして、すぐ廻りの四角を縫ひます。廻り裂は出來上り圖にある如く、裏表へ吹き返り、四角が額縁のやふに四角になるのであります。先づ裂を堅に二つに折り、輪の方から四寸五分と計つて、丈全體に巾の標をつけます。これが吹代となります。次ぎに裂を一枚に開き丈の片端から鏡の巾一尺八寸に八寸五分加へた寸法の所を折り、第一圖のやうに山形に本返し針で縫ひます。眞中を一寸縫殘して

置きますのは、それを吹きの厚身とするためです。縫へたらば縫目を割つて置きます。次ぎに其の縫目から鏡の丈四尺六寸に四寸三分加へた



圖

寸法の所を二つに折り、前縫つたと同じく竪横四寸三分の縫代で矢張り山形に割り縫ひにします。次ぎに其の縫ひ目から鏡の巾一尺八寸に四寸二分加へた所を二つに折り、前同様山形に縫ひます。今度は其の縫目から鏡の丈四尺六寸に四寸三分加へた所と最初の丈の端とを合せて割縫ひにし、矢張り眞中を一寸殘して山形に縫ひます。以上で廻りの四角が縫へた譯です。

口鏡と廻り裂の縫合せ

前に縫ひました廻り裂四角の角と鏡裂の四角とを合せ、裏表別々に四方を合せ縫ひにします。但し綿を引繰り返す時の爲め、丈の一方は上下一寸ほど縫つた外は全部縫ひ殘して置きます。縫へましたら折を廻り裂の方へ返し、表布の角の縫込みだけを三角に表裂へ返して一針すくひ留にし四方の合せ縫ひにはかくし躾をかけて置きます。

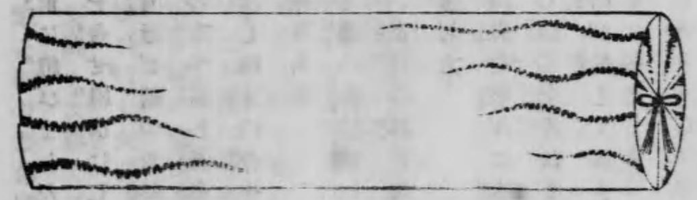
ハ綿入れ方

普通の鏡蒲團に入れるのと少しも違ひません。たゞ少し厚くして凡そ二貫目の綿を入れゝばよろしいです。

ニ綴ぢ方

四角や廻りに綿がよく行き附くやうにして明いて居る所を綴けましたら綴ぢを入れます。糸は四本で出來上り圖の位置にとぢ、一寸余り糸を結び殘して置きます。

出來上り圖（本枕）



枕

枕には本枕半枕、小枕の三種があります。上圖出來上り圖は本枕で、夜具蒲團と同じ布で造つた飾り枕でございます。横に六ケ所折り込んで中央を括り、其上に揚巻結びと云ふ絹紐の先きに房を附けたものが綴附てあります。

二、裁方及び積り方

裁方積り方などは至極簡單ですから申し上げる程のことはありません。但し飾り夜具用の本枕としては夜具、鏡蒲團の裁方の時、同じ地質で裁つてありますから、すぐ縫ひ方にかゝります。

三、縫方

イ表縫ひ

出來上り寸法を丈三尺五寸、直徑五寸五分の太さといたします。

用布は巾一尺七寸、長さ四尺二寸の純子が、既に夜具の時取つてあります から、それを巾と巾とを合せて二つに折り、輪の峯から巾一杯の所と、五寸 間隔位に篦標をつけます。次きに極く良い日本紙を五寸巾位に切り、丈 の裁切の端へ貼りつけて、布をぴんと張らして置きます。

日本紙を貼りつけます理由は、出來上り圖に示した如く、枕の兩頭は六ケ 所に折り込んでありますので、其の折目の角を崩さぬため、最初裂に裏打 をして置くのでございます。

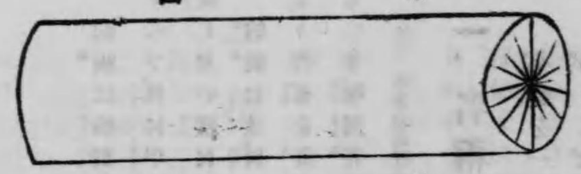
紙を貼りましたら、巾の篦標へ、通し篦と云つて帯に標をつけたやうに直 線に標をつけ、極く〳〵細かな針目で合せ縫ひにします。（紙の附いて居 る所だけは半返し針に）縫へましたら平鏝をかけて縫目を削り、丈の裁切

りを五分の縫代で裏側にずつと折目をつけて置きます。別に白金巾を表裏と同じ寸法にして、表同様に巾を合せ縫ひにします。これは枕の下掛とでも云ふやうなもので、此の袋の中に芯になる綿を入れて枕の型を拵へます。

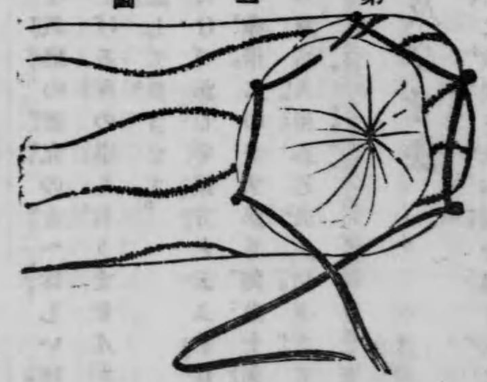
□綿の入れ方

前申したやうに枕の芯は綿で造ります。先づ九百匁の綿を一枚一枚と次ぎ〳〵に極く堅く卷き重ね、前の白金巾の袋の中へ入れ、第一圖のやうに兩頭で括りしめ、縫込みは中に押し入れて置きます。次ぎに第二圖に示すやうにして純子の上側袋を覆ぶせ、兩頭の六ヶ所に四本の絹糸を通して、其の糸を引きしめますと第三圖のやうになりますから、六ヶ所へ出來た三角を、筧で一つづゝ内へ押し入るのです。さうすると六ヶ所へきつかりと折がきまりますから、中央の括つた所へ揚卷紐を附けます。揚卷紐は好き〳〵のものを糸屋に賣つて居ります。

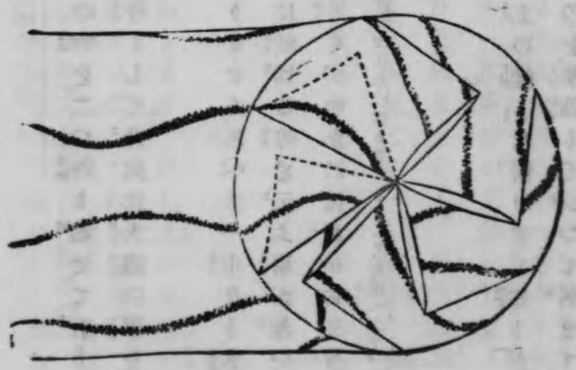
第一圖



第二圖



第三圖



蚊帳

蚊帳は特別な裁縫の研究の方へ珍しい種類の物を、二つ許り載せて有りますので、別に申上げる程の事も有りませんが、順序として此處に大體の事を重復しない樣に記して置きます。

蚊帳には、別にむづかしい裁方と云ふ物は有りません、凡べて一巾なり、大巾なりの布を其の儘用ふのですから何處を何寸に裁切る等と云ふ事が無いからです、唯用布が幾ら入用かと云ふ、積り方と、縫方とがわかれば好いのです。

註「特別の裁縫の研究」に底の有る蚊帳は順問板橋隆之助氏の新案特許の仕立方に付き特にこゝにて申添へます。

一、名稱及び寸法

全體を一口に蚊帳と云ひ、裾を鎭と云ふ。上の廻りに附けます飾りが樣飾りと云ひ、其の他天井と、天井の四角に有のを、唯飾りと云つて居ます。

丈けと云ひますと、蚊帳の高さで、五尺以上が普通です。廻りは何尺等と申さずに、布の數を呼ぶ事になつてます。そして其れが着物で子供物、本裁と云つた樣に、六八、八八、七九と云へば大さが判るのです。鎭は、一尺巾でつけるのが本統ですが、儉約にすれば半巾でも差支へありません樣飾りは、半巾の物を、天井の方へ半分、横の方へ半分切らずにつけますから、眞中の折り目が、天井と廻りの布をはんだ上になります。天井は眞中へ半巾の半分の物を、十文字に絎けつけます。四角には一尺四方の布かそれを三角を半分にした物をつけます。乳は、丈け七寸半巾の物を二つ折りにして、本絎けにした物を使ひます。

二、積り方と縫方

用布は左の公式に依つて、積れば直ぐにわかります。但し大巾は並巾の二枚故、其の積りにて、布の數の數へ方を、布の巾に依つて數へます。

$$\{丈け\times(\text{間口の布數}+\text{奥行の布數})\}+(\text{天井の長さ}\times\text{奥行の布數})=\text{總用布}$$

個りの布數　個りの用布　天井の用布

注意

天井の長さは並巾の時は1尺に間口の布數を乘け、大巾の時は布數の半分を乘けますが、2尺に大巾の布數をかけます。此の分量行の布數を今の樣に布巾に依つて乘けても出ますが、此の時は後で間口の布數を乘けます。

縫ひ方は凡べて、蚊帳獨特の縫ひ方を用ひます。

二枚の布を、下の布の方を、二分計り上に出して、上の布の上に折り返へして、三枚重なつた處を縫ひます、折りは裾を右に持つて皆手前に返へします。糸は麻を用ひますのが本統ですけれ共、取扱ひが不便な爲め、普通絹糸を用ひます。飾り布は重に紅色を用ひます。部分〳〵に著いての委しい事は、特別な裁縫の研究に出て居ます、變つた形の蚊帳のと、普通の蚊帳でも少しの違ひもございません。（松戸左中遞）

新案の蚊帳

一口に蚊帳と申しても、種々ございまして、當節流行の縫目無し等と申しますのは、縫ひ方がどうかう申すのでは無しに、織方に有るのでございます。一般に蚊帳等は、縫ひにやる物か、出來たのを買ふ物の樣に、考へられて居ますが、決して其樣に六ヶ敷物ではございません。入用丈けの布地を買ひまして、一定の縫方で仕立さへすれば宜敷いのです。此處には、立つたまま出入の出來るのと、底の有る蚊帳とでも申しませうか、蚤や害蟲の入るのを防ぐ樣に出來てる物の二つを記します。

▲座らずに出入の出來る蚊帳

1 用布の積り方

普通の蚊帳よりは大幅で一布、並幅で二布、恰度幅に二尺だけ廻りの布を多く用意致します。從つて緣布も其れだけ長くなる譯でございます。

例へば丈五尺にて八八とすれば

並幅物

(5尺×8)×4 ＋ (5尺×2) ＋ (8尺×8) ＝234尺

一丈　重ナル用布　天井ノ用布　總用布

一面ノ用布

廻リノ用布

大幅物

(5尺×4×4)＋5尺＋ (8×4) ＝117尺

一丈　重なる用布　天井の用布　總用布

一面の用布

廻りの用布

縁布は宇幅二つ折り(袋)は宇幅にて、四角に一尺の襞をとります。最も上流社會では、縁布も小幅二つ折りで用ひ、天井くは小幅四つ折か、三つ折で十文字を入れます。乳は同じ幅小幅四つ折りの物に共色の金巾安物は共色の紙を心に入れて用ひます。地質も上等物は絣縮緬を使います

ハ　折り縫に致します。廻りの布を、全部天井同様はぎ合せます。

ロ　廻りの布を、天井の布をはぎ合せます。

イ　順序は、裾から縫ひまして、折を前に返します。布の上へ直ぐ折り返して其の三枚重ねる時に中に二枚の布を重ねるなつた處を二分五厘程先へ出し、上の方は、蚊帳の縫ひ方と同様逆になりません。

2　縫ひ方

並物は絣金巾です。

ハ　一布の並幅で二布、恰度二尺の重なりを忘れない様に作ります。天井廻りを同じく蚊帳の縫ひ方で縫ひ合はせますが、此の時大幅なれば三つ折れます。是には上前も下前も同様に縫つて置きます。此の時下から五寸の處を全體の中央へ鉛の重りを

立つた儘出入りする口になるので、室の都合で打合目は、何處に致しましても關いませんが、左前になりません樣に注意致します。

次に同じ縫ひ方にて、廻りの布の裾の方へ、鎮をつけます。四角に角から左右へ一尺づゝの襞を取る事を、忘れてはなりません。

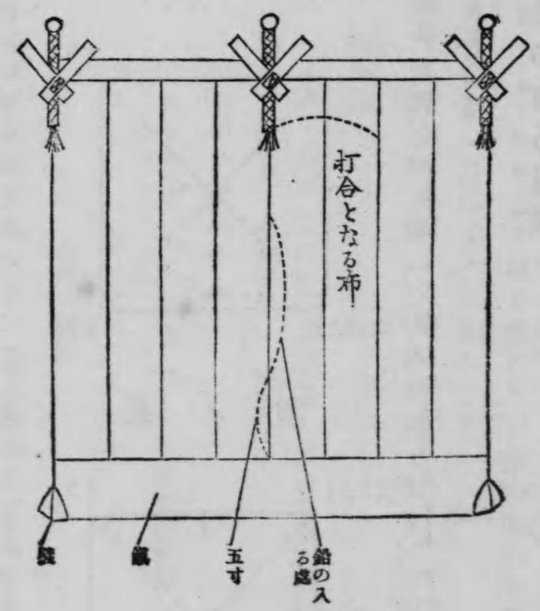
ホ　緣布を半幅のまゝ、天井と廻りとへ四分の一幅づゝ出る樣にして、衍けつけます。天井の四角には、四角又は三角の共布にて飾りをつけます。大きさは蚊帳の大小に依つて、幾か加減はありますが、一尺四方位が普通です。廻りを衍けつけて其の上を太白二重の絲で、二目落に飾ります。

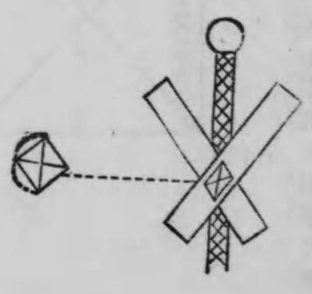
ヘ　乳と輪のつけ方は、乳は出來上り丈け七寸、巾並巾の四つ一に心を入れて、本衍けに致しました物を、二つ右を上に乳の丈けの半分より下の處で、交叉へに致しまして、其の下へ輪に附いて居ります紐を入れて、圖にございます樣に、太白の二重にて、桝形に飾り縫ひを致します。

桝形の飾り縫

並巾物仕立上の圖

（正面よりみたる）

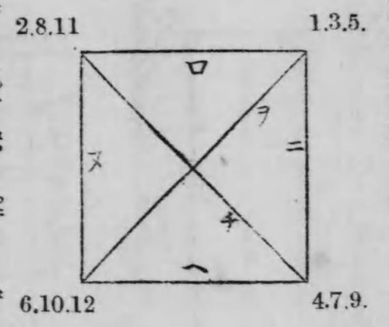




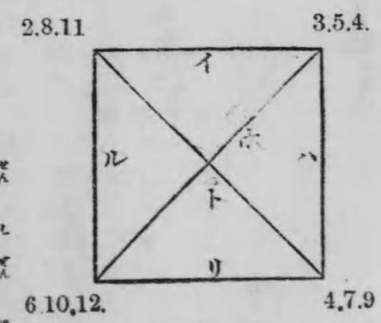
乳と輪の附けたる圖

此の桝形の飾りは、確かり留めますのに極くよいものでございますから、兩面に、無駄絲を使わずに縫ふ、順序を申上げませう。

表ノ圖



裏ノ圖



數字の順に、針を渡して參ねりますと、イロハの線が自然に出來て參ねります。

○底の有る蚊帳

1　積り方

此の蚊帳は、蚊帳地許りで無しに、キャラコ又は、テンジク木綿が袋の部分丈け用はれます、其の變り鎮がつきません、つまり出入致します處、横になりましてから頭の在る處だけが、蚊帳布にて高くなりますので、仕立上の圖を御覽になれば形は解ります、

例へば五尺の丈けの三六の蚊帳で底をつけますには

並巾物

(5尺×12)＋(5尺×6)＋(5尺×3)＝115尺……蚊帳布總尺

後及び正面布　兩横用布　天井用布

並巾物の底さして

(9尺＋6尺)×6＝90尺……蚊帳布總尺

下ノ底　上ノ底

正面ノ布數

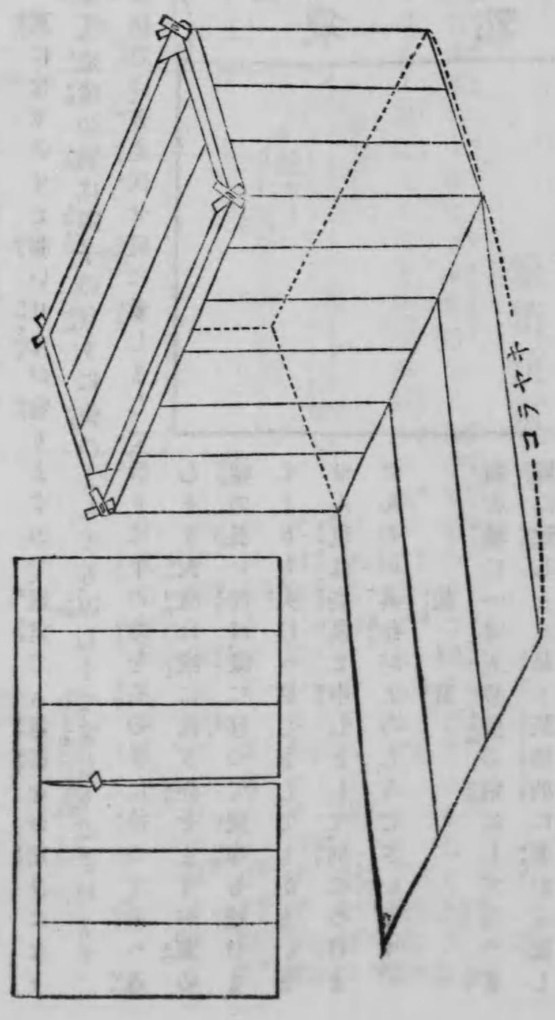
9尺－6尺＝3尺……横幅ト等シキモノ

下ノ底丈　上ノ底丈

縫と乳を取ります事は、前の通りでございます。

2 縫ひ方

蚊帳布の部分は、凡て前のと同樣な縫ひ方でございますが、打合目を作りません、是れはボタンで留めますから、重なりは極く少しあれば、宜しうございます、鎭をつける樣にして、底布を附けますが、底布は前に、幅をはんで置きます、丈は續いて上下出來ますが、短い時は矢張り、足して置きます。是れは、敷蒲團の上に下の底が載ります樣に釣りまして、蚊帳の中へは、ほんのはほんの掛ける物丈け持つて入ります、下の底は敷布の替りになりますが、洗濯が大變でございますから、矢張り底の上へ一枚敷いて、上の底の下へ掛けた物が當る樣に、仕ますのが一番宜しいのでございます。體は袋の中に入つてる譯ですから寢像の惡いのが見える等の氣遣ではありません。



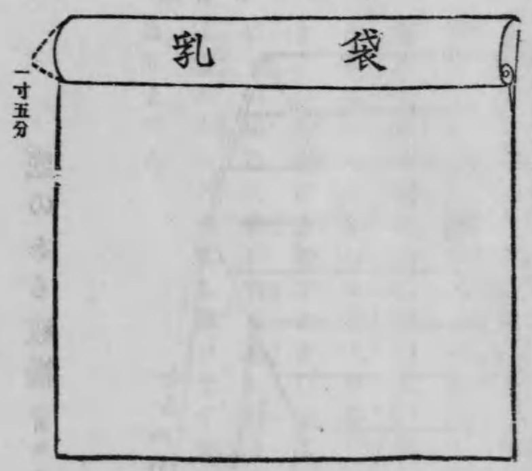
底のある蚊帳（出來上り圖）

カーテン

夏になりますと、強い日光が當りますので、誰君でも窓掛をお用ひになります、地薄の物は障子の替りに使ひましても、涼しくて宜しうございます。

縫ひ方は、普通伏せ縫に致しまして、折りは下の方を右の手に持つて、前へ返します、大概は縫にはぎ合せますが、窓の幅の長い時は、縦に切つて幾布も續けますよりも、丈けへ足しましても、かまいません、乳は袋乳と申しまして、別につけませんのが具合がよろしうございます。

カーテン



袋乳

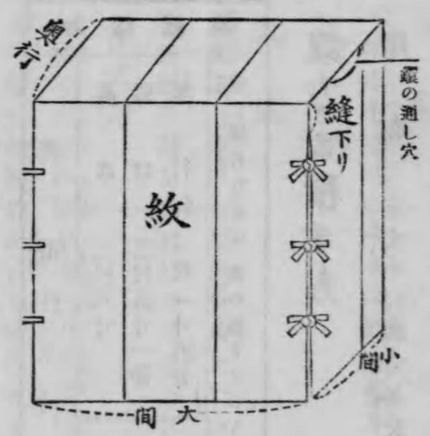
圖の樣に一寸五分位の幅にして、三つ折縫に致します、最も裝飾的に表から返し縫に致しましても宜しうございます裾は裁目の場合に限り、三ッ折縫に致します。

簞笥油簞

簞笥油簞の中には、日本簞笥のと、西洋簞笥のと、二種がございまして、大きさも、それ〴〵幾通りも有りますが、裁方や縫ひ方は、どちらも同じです。唯用布が違ふ丈けですから、積り方を知つて、寸法に依つて積つて行けば、宜敷ので有ります。此處では、日本簞笥の普通一般に用ひられて居りますのを、お話致します。

一　名稱及び寸法

出來上り圖
（正面と側面）



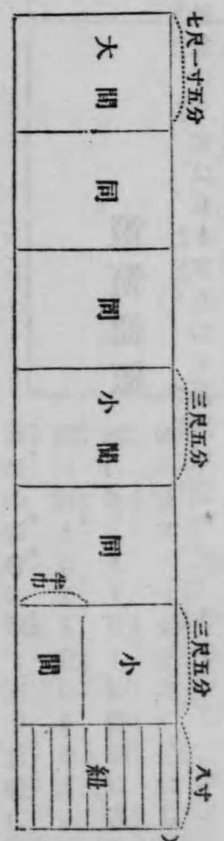
和服單筒			
並一番仕上寸法			
高さ	二尺八寸	縫下り	一寸
間口	二尺五寸一分	環通し穴	三寸
奥行	一尺一寸五分	紐附	七寸置き

但し蓋付なれば、蓋の高さとして二寸五分長く見積ります。

二　裁方と積り方

1　用布　三丈一尺四寸外にだし市三尺八寸五分

2　地質　木綿類



裁方

71.5寸×3＋30.5寸×3＋8寸＝314寸……総尺の出し方　積り方

蓋附の時は大間と小間の一だけ二寸五分づゝ加へて後は上の表の積に数します。

三　縫方

1　小間

一巾の布と、半巾の布の裁目の方と、巾いつぱいに合縫にして、半巾の方へ折りを返へします。

2　大間

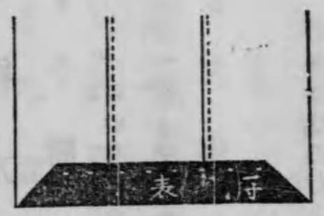
大間は、一巾の布を三つ巾をいつぱいに合せ縫ひではぎ合せます。折りは前の裾を右に持つて、前へに返へします。

3　合せ方

小間の半巾の布を後側の大間へ巾いつぱいに合せ縫ひにして、奥行の上の處と、小間の裁目と縫ひ合せます時、真中から一寸五分づゝ三寸

を環通し穴として、明けて置きます。前は縫下り一寸だけ、小間と大間を合縫にして、後は耳ですから、其盡にして置きます。環通穴の處は、縫込の折りをつけて隱蹟を致します。

前の裾がけ



4　裾がけ

一寸の出來上りに、三つ折り衍けに致しますから、最初二寸折りまして、夫を二つに折つて、角は圖の樣(男物の衍衿の先きと同じ)にして衍けます。

5　紐の衍け方と附け方

イ、七分巾の紐を巾いつぱいに、本衍けに致します。後先は裁目のまゝ衍けも縫ひも致しません。

ロ、十二本を衍け終りましたら、七寸置きに前の大間と小間に三つ宛六つ、左右で十二本、圖の樣に一寸程深く重ねまして、確りと取りつけます。

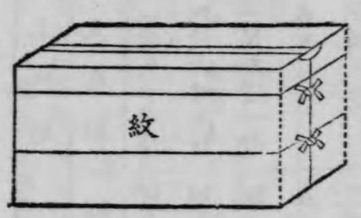
長持油簞

長持の油簞には、大名用と云つて、只今では宮家舊家族方で使はれてますものと町家用と云つて普通一般の民間に使はれてますものと二種御座います。

尙當今は御座いませんが、昔多く用ひられました京間入と云つて、底に四個の車の有ます、大一番の長持油簞は、唯參考迄に、申上げて置きます。(布地は簞笥のと揃へるのが普通です)

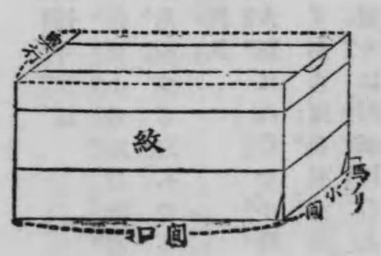
一、名稱と寸法

大名用
(出來上り)



長持油簞

町家用
(出來上り)



仕立上寸法		大名用	町家用
高サ		一尺九寸五分	同上
間口		四尺六寸七分	同上
奥行		一尺九寸一分	同上
紐丈		八寸	なし
環通穴		三寸	三寸
馬乗		なし	二寸

裁切寸法は仕立上寸法に兩端の縫代を相當に見積つて加へたものです。

京間入

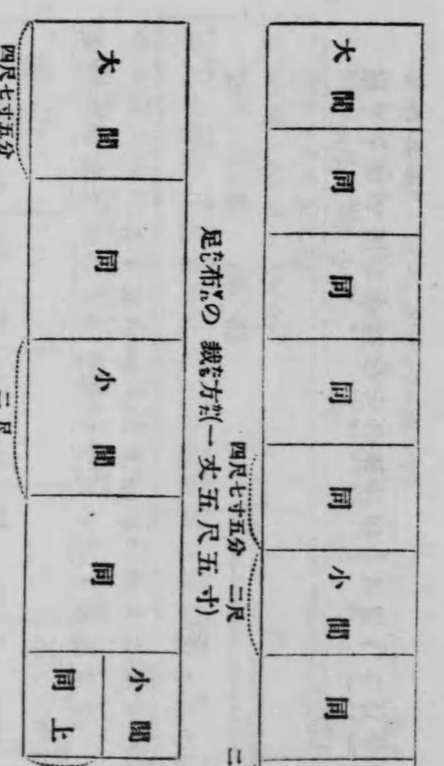
大間に八布を、小間に三布を用ひますから、用布五丈五尺入ります。縫方は町家用のと同じで、大きくした丈けで有ります。

二、裁方と積り方

1、町家用裁方（木綿類）

用布　一反（二丈八尺）と一丈五尺五寸

一反の裁方（二丈八尺）



積り方

47.5寸×5＋20寸×2＋2.5寸＝280寸
大間×4＋小間×2＋縫り＝一反　……總尺の出し方

280寸＋47.5寸×2＋20寸×3＝435寸
一反＋大間×2＋小間×3＝總尺

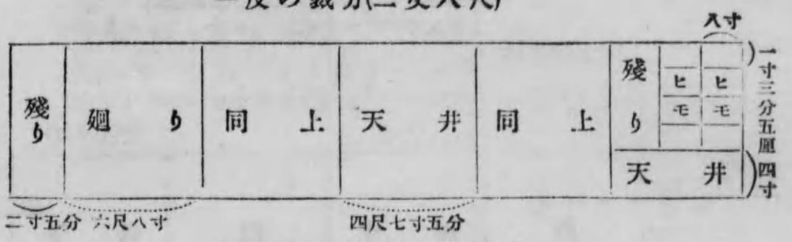
足し布

47.5寸×7＋20寸×5＋2.5寸＝435寸
大間×7＋小間×5＋縫り總尺　……總尺の出し方

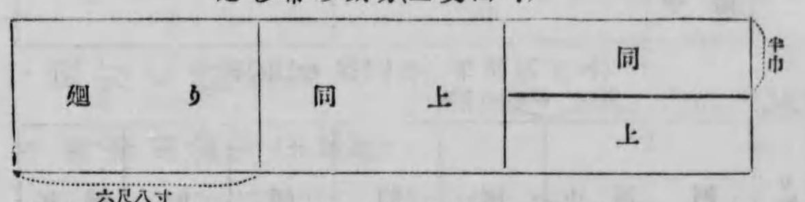
2、大名用裁方

用布　五丈八尺四寸

一反の裁方(二丈八尺)



足し布の裁方(二丈四寸)



廻りとは大間に小間の半分奥行の$\frac{1}{2}$を足して打合せの二寸を加へたものです。

裁方

積り方

25寸＋68寸×2＋47.5寸×3＝280寸
殘り　＋廻り　×2＋天井×3＝　一反 ……總尺の出し方

68寸×3＝204寸
廻り×3＝足し布 ……總尺の出し方

280寸＋204寸＝484寸
一反　足し布　　總尺 ……總尺の出し方

以上の樣に式を三つにしても町家用の時の積り方の樣に二つにしても別段變りは有りません。又廻りの布の長さに廻りの布數を乘けて天井の布丈けに天井の布數を乘けて加へても同じです。

三、縫方

1、町家用

イ、小間、大間の布はぎ。

小間は一巾の布と半布の方へ又一巾の布を合せ縫ひにして半巾の方へ折りを返へし次に一巾の布の方へ裏と表と合せて縫ふ事は申上げるまでも有りません

ん。大間は一巾の布を七つはぎ合せまして、折りは中央の布で向ひ合ひます様に、三つづゝ同じ方に返へします。

ロ、小間と大間の縫ひ合せ方

裾の方を圖に有ります通り、二寸だけ馬乘りとして殘して、高さから奥行、又高さと云ふ様に、小間を大間にはぎ合せ、奥行(天井)の中央から左右に一寸五分づゝ、三寸の環通し穴を明けますのは、簞笥油簞と同様です。折りは凡べて小間の方へ返して置きます。

ハ、馬乘と環通穴

裾は耳ですから其儘にして、馬乘は縫止めた一寸位上から縫目を割つて、縫代だけのしをりを、大間の方へも小間の方へもつけ、三つ折り衝けに致します。

環通穴は、縫代だけを折つて、裏からとぢ糎をかけて置きます。

2、大名用

イ、廻りの布、天井布のはぎ方

廻りは、一巾の布二枚、半巾の布一枚を、町家用の時の小間の様に合せ縫ひにして、折りも上の方へ返へし、兩端の裁目の處は三折衝けにして置きます。天井は一巾の布二枚の間へ、四寸巾の布を入れイ折りは向ひ合ふ様に、はぎ合せます。

ロ、天井と廻りの合せ方

廻りの布は、兩方の小間の眞中で、間口の前と後とから來た布が二寸づゝ重なる様に、半巾の布と天井の一巾の布と、續けて縫ひます。環通穴は、町家用同様に、小間の眞中から一寸五分づゝ、三寸明けて置きます。

ハ、環通穴と紐の縫方及びつけ方

環通しの所は、天井も縫込代だけに、折つて裏からとぢ糎をかけ、小間の方も廻りの布を二寸だけ二枚重ねて同じ様に致します。(重ね方は向つて右を上に、左右の折り合せも同様に重ねます)

紐は簞笥油簞の時同様、いつぱいに本衍けにして、後先は裁目のまゝ天井とのはぎ合せから、七寸の處へ一本、其處よりまた七寸の處へ一本、上の布へは三つ折り衍けの上へ一寸位の深さに、下の布は、二寸打合せになる處から、一寸位の深さに簞笥の時と同じに都合八本つけます。

釣臺油簞

簞笥、長持ちの油簞を、お話し申上げましたから、順序として、釣臺の油簞を記しますが、是れは極く簡簞な物で種類も別に御座いません。

一、名稱と寸法

地質は本綿、簞笥、長持のと揃ひに致します。

欠

積り方（四布物トシテ）

9寸 × 4 ＋ 5寸 ＝ 41寸
布巾×布數＋丈ケノ巾ヨリノ長サ＝裁切 ……裁切の出し方

41寸 × 4 ＝ 164寸
裁切 ×布數＝總尺 ……總尺の出し方

二、縫方（地質）

1、地質

縮緬、羽二重（重に袷仕立）絹、モス、木綿、金巾

2、單衣仕立

大巾物、一布等の時には、裁目の處を端縫にして置けば、宜敷御座います
が、幾布もはぎ合せます時は、左の樣に致します。

イ、無地物

欠

紋や名前の御座いません物は、ヅラシ伏せ縫にてはぎ合せ、折りは皆同じ方に、どちらへでも並べて返へし、裁目を端縫にして置けば宜敷御座います。

ロ、紋附、名前つき

紋や名前の有ります物は、唯折りを左前にならぬ様注意致しますだけで、紋や名前の下の方からヅラシ伏せ縫ではぎ合せて、手前へ折り返へします、廻りの裁目は矢張り端縫に致します。

3、袷仕立

一布の時は、單衣への仕立て同様にして、唯端縫の替りに、裏表を合縫にして、竪の中程で五寸程明けて置き、折りは毛抜き合せにして其處から表へ返へし、繕けて置きます。

イ、無地物

單衣仕立にも有ります様に、上下が定つて居りませんから、裏表共合縫で布をはぎ合せましたら裏と表と向ひ合ふように、同じ方へ皆折つて、廻りは一布の袷仕立の様にすればよいのですが、中で裏表を綴ぢますから、一布づゝ合せては、横を上下表と裏と合せ縫ひにし、又裏表はぎ合せて綴ぢては、又裏と表と横で合縫に致します。

ロ、紋つき、名前つき

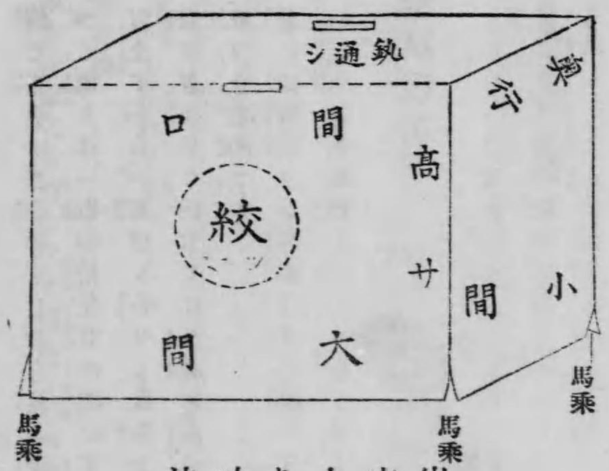
是れは唯折りを單衣仕立の紋つき名前つきの様に返へすだけで、後の仕立は無地物と同じで有ります。

4、無双仕立

袷で裏をつけない仕立方を、無双仕立と申しまして、此の場合はわの方が上になり、横の縫合せ目の有る方が下になりますので、其の積りで下から縫うては、前に折りを返へします(表)(布)中を綴ぢたり、竪の處を明けて置いて、表へ返へしますのも、皆同じに致します。絹は凡べて、火熨斗で仕上げを致します。

挾箱油簞

出來上り圖



出來上り寸法

間口	一尺六寸
奥行	九寸八分
高さ	一尺二寸
馬乘	二寸
鈎通し	三寸
裾返り	一分

一、地質

表は多く大巾物の純子類を用ゐ稀に小巾物の綸子などを用ゆることもあります。紋は殆んど刺繍紋に限られて居ります。そして表の用布は凡て布を竪地に使ひ裏は小巾物を横地に用ひます。

二、裁方及び積り方

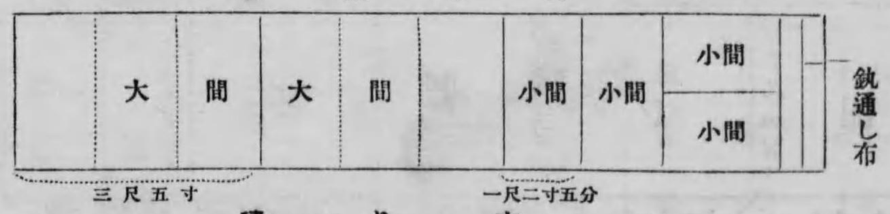
1 表大巾六尺、裏同尺にての裁方

積り (12.3寸×2)+10.4寸+(12.5寸×2)=60寸
(大間の高さ×2)+奥行+(小間の高さ×2)=總尺

裏は表と同じですから略します。

2　表小巾物一丈九寸、裏布小巾九尺七寸二分にての裁方

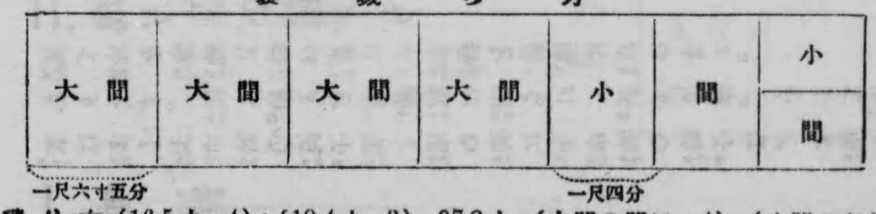
表　裁　ち　方



積　り　方

(35寸×2)+(12.5寸×3)+1.5分=109寸　(大間×2)+(小間×3)+鈘通の布=總尺

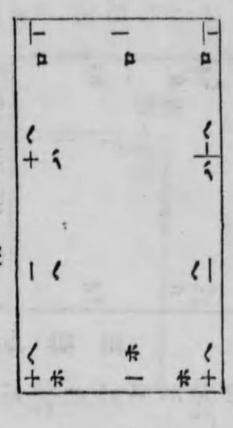
裏　裁　ち　方



積り方 (16.5寸×4)+(10.4寸×3)=97.2寸　(大間の間口×4)+(小間の奥行×3)=總尺

三、標付（大巾物）

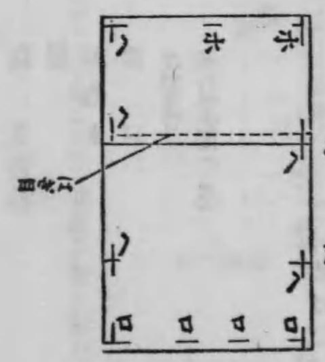
大間を裁ち切ったらば裏巾から縦に二つ折にして次のやうに標を附けます。但し小間は二枚重ねてします。



注意

イ　高さ(奥行)
ロ　馬乗裾
ハ　間口
ニ　小間高さ
ホ　奥行(小間の巾)
ヘ　鈘通しは先づ三寸丈け三寸五分の紙に糊にて裏側から貼り附けて後三寸の穴を切ります。

裏は大巾物ならば表同様にてよろしけれど、小巾物を横地に使ふ時は、大間は四巾小間は一巾半はぎ合せた後表と同じく二つ折にして標をします。判りよい爲圖に示しますと次の通りになります。



標の相印は表と同じ、はぎ目の雨折は返しの事

表用布が小巾物の時は大間を二枚はぎ合せ大巾物同様にしたのち大巾物通りに標をすればよいのです。

四、縫方

イ　小間の裾を表と裏と合せ縫ひにし、折を裏の方に返し、表布が一分だけ裏へ返るやうにして馬乘を縫ひ表へ返して平鏝をあてた後圖の如く假躾をかけて置きます。左右二つの小間が出來たら大間にかゝります。

小間の躾をかけた圖

ロ　大間の裏を横地に縫ひ合せ標附の圖の如く次ぎに小間の時と同じく表布と合せて裾から馬乘を縫ひます。

ハ　次ぎに大間の表と裏との間に小間を挟み、四枚一緒にして一方の馬乘りから初め奥行の天井と終りの馬乘までぐるりと縫ひ合せます。

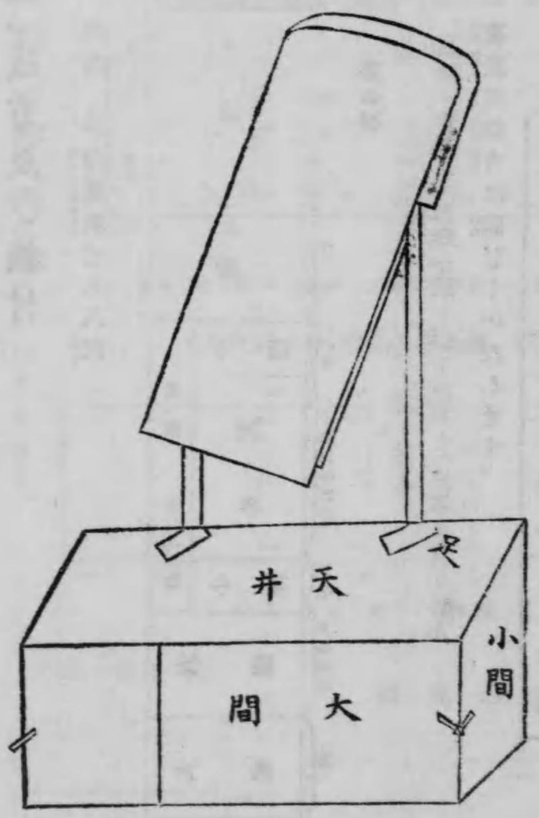
二　片側の小間が附いたら今一方の小間を前同様に挾んで縫ひ合せるのですが、此の時奥行天井の大間裏を五六寸縫ひ殘して置き三枚だけで縫ひますから小間裏布の表へ針目が出ますけれど、跡で其上を紮けますから差支へありません）其の穴からくるりと全體を返して引き出し、其の口明きを紮けて置きます。

ホ　鈎通しの穴は標附の所に述べた通り裏から紙を貼り、よく切れる庖刀で表裏を重ねて眞直に切り、二分の巾に表の共布にて筒袖の口のやうに縁を取つて置きます。但し縁のはぎ合せ目は上へ向けます。（これは挾箱の棒が通る時上側は下になつて見えませんが、下側はよく見えるからです）

鏡及び鏡臺の覆

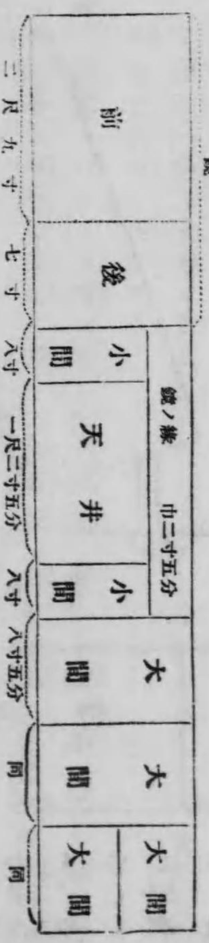
鏡及び鏡臺の覆ひは兩方とも、同じ地質の品を用ひます。婚禮には紋を染抜くとか又模様を附けたる羽二重、縫紋等のものを用ひます。平常用としては、重に友禪ものが普通になつて居ります。

出來上りの圖



一、裁方及び標付

用布　小巾裏表とも八尺



積り方

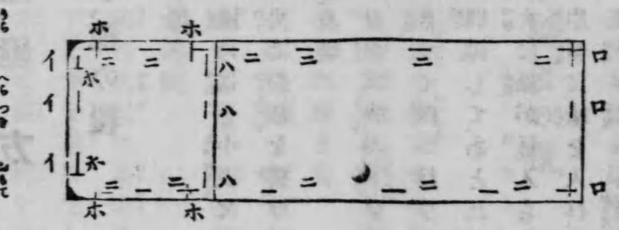
14.+7.+(8.×2)+12.6+(8.5×3)=80.寸

鏡前+鏡後+(鏡臺小間×2)+天井+(大間×3)=總尺

裏表共裁方は同じくいたします。

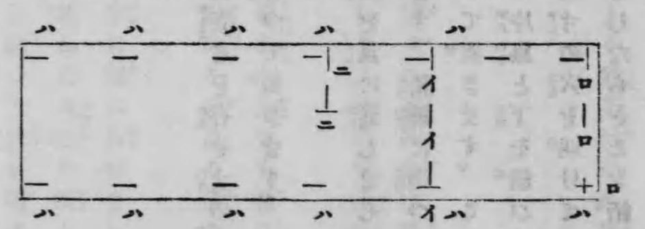
鏡寸法表		
鏡丈 二尺八寸	巾 九寸	後厚 六寸六分
鏡臺		
高サ 八寸	巾 三分	奥行 六寸九分
間口 一尺三寸六分	前一寸縫下に	丈 三寸
鏡立穴	紐附	上より 三寸五分

(1) 鏡の覆、前後の裏表を重ねて



イ 顯　ロ 前丈　ハ 後丈　ニ 巾　＊ 線の合じるし

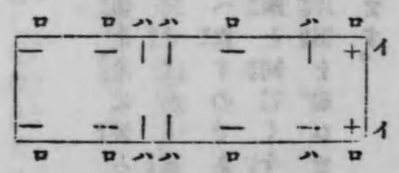
(2) 鏡臺覆の筐附、(小間天井)



イ 天井　ロ 丈　ハ 巾　ニ 穴

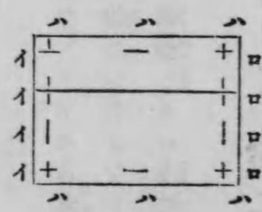
裏の筐開も表と同じくいたします。

(3) 附筐の縁



イ 丈　ロ 巾　ハ 後前の筐合

(4) 大間一巾半



イ、天井　ロ、丈　ハ、巾

二、縫方

1、鏡の覆

イ、緣

緣の切を中表にして、裏と表とを合せ、丈の處を縫ひましたら、表へ返し、中央に假縫を掛けて巾を當つて置きます。

ロ、身頃

身頃の後の下を縫つて折を裏に返しましたら、緣の切を間に挾み、合篦を合せて、四つ縫ひに致します。脇縫に廻つたら、凡そ三寸ばかり、裏一枚を別にして、あと三枚を縫つて置きます。こゝから表へ返すのであります。次に緣が這入らない前の片脇と下を縫ひましたら前と同じく今一方の片側に緣を入れ、やはり三寸の穴を明けて置き、前の片脇を縫ひます。三寸の穴から表へ返しましたら、そこを衍けて置きます。

緣と身頃とは毛抜合せによく鍛を掛けて置きます。

2、鏡臺の覆

イ、天井

天井の鍼立ての所は足の這入る處四角に出來上りより三分少く切りまして角々に鋏を入れて裏から二分五厘縫代に縫つて置きます。

ロ、小間の裾と前

小間の裾と前(明く處)とは裏表を合せて縫つて表へ返し、毛抜合せに鍛を掛けます。他の裁目には假縫を掛けて置きます。

ハ、大間、前

前の大間は裏表とも(一巾半に縫ひ合せまして、裾と脇縫下り一寸の處まで)三方を縫ひましたら、小間から天井を挾んで、四つ縫にいたします。天井にて、裏一枚を放し、三枚を縫つて穴を明けて置ます。こゝから表へかへします。

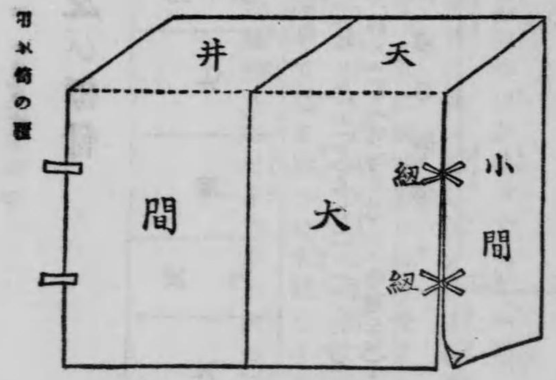
二、大間、後

後も前と同じく一巾半にして、裾を縫つたら小間と天井とを挾んで四つ縫にし、天井で裏へ三寸の穴を明けてこゝから表へ返します。表へ返したら綴けます。鏡を掛けまして紐を付くればようございます。紐は箪笥油箪の時に述べてありますから略します。

第十章　用箪笥の覆

用箪笥の覆は、紋附又は唐草模様の木綿地を用ひますのが普通で御座います。これは箪笥長持等と變りはございません。

出來上り圖

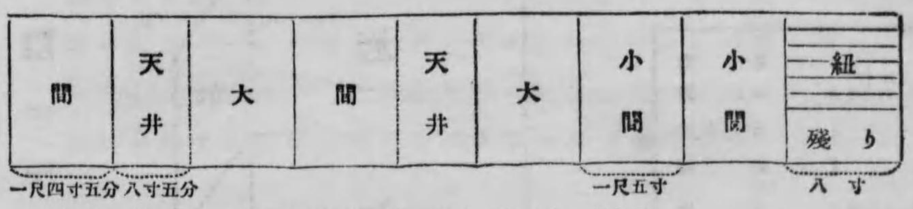


用箪笥の覆

寸法表

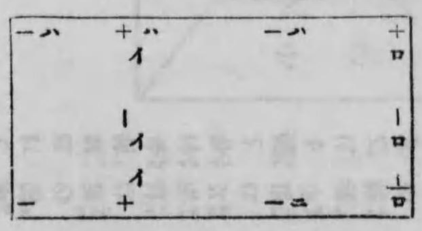
高サ	一尺二寸五分
奥行	入寸五分
間口	一尺六寸二分
懸掛	一寸
前垂サゲ	一寸
紐丈	入寸
紐巾	二分

一、裁方及び標付

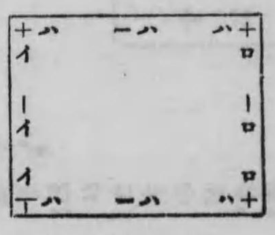


積り方　(14.5寸×4)＋(8.5寸×2)＋(15.×2)＋8＝113寸
(大間×4)＋(天井×2)＋(小間×2)＋紐＝總尺

大間の篦附



小間



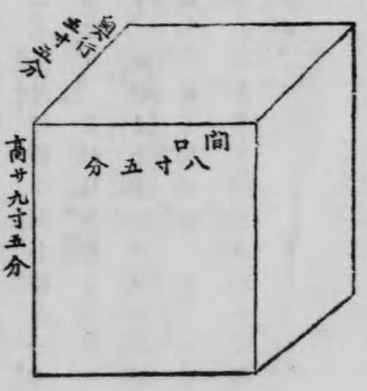
二、縫方

紋附なれば、よく紋を合せ、紋がなければ其まゝ、大間二布の中心で縫ひ合せます。

次に間口の巾を當りまして、小間(一布)の篦とを合せ、竿の時と同じく後から天井に縫ひ廻し、前を一寸程縫ひ下げましたら、丈夫な糸で止めて置きます。これは油單を掛けたまゝ、引出しを自由に開ける爲で卿座いを前の明いて居る所へは大間と小間に上より四寸開いて居る處から、一寸下つた所へ、同樣に向ひ合せて紐を丈夫に付て置き、雌れた場所と)四寸下げて及び裾は、竿、竹のやうに折けて置きます。(兩側とも同じ)

針箱の覆

出來上り圖



出來上り圖に示します通り、鉄箱の馬乘と鉄通しを除いたと同じ形に縫ひます。地質は大抵唐草木綿を用ひます。寸法は、高さ九寸五分。間口八寸五分。奥行五寸五分として次ぎのやうに裁ちます。用布寸法は四尺八寸にて、裏表同じです。

一　裁方及び積り方(篦附)

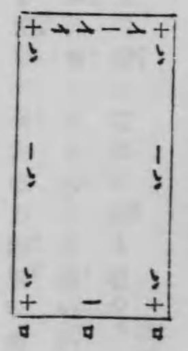
積り方

(97.5×2)+8.5+(10.×2)48＝寸
(大間兩脇)+天井+(小間前後)
＝幅尺

大間の篦

大間は眞中から二つに折つて篦にして篦を附けます。

小間の篦



篦を附け(布が二枚重なります)小間は其の

二　縫方

裏表の篦付が出來ましたら、大間及び小間の裾を各自裏表合せ縫ひにし、裏へ五厘の見返しをつけて置きます。次ぎに小間を大間の裏表の間へ挾み、大間のイと小間のイ、大間のロと小間のロの篦とを合せて待針を打ち、四枚の布を一所に大間のハからイまでの篦まで縫つて來ましたら、次に大間のイからハと小間のイからイまでの篦を合せて天

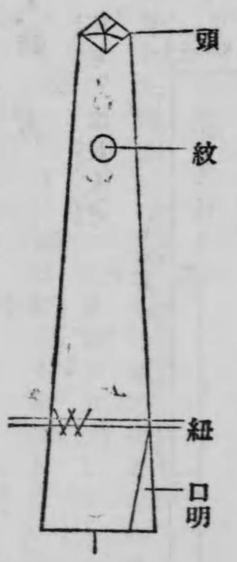
井を縫ひます。（此間三寸計り裏布一枚を縫ひ殘して置きます。）天井が縫へましたら裾まで前と同じやうに縫ひ下つて行き、縫ひ終りましたら天井の穴より表へ返し、そこを紮けて置きます。そうしますと一方だけ小間が這入つたわけになりますから、今一方も同じ縫方で小間を入れますと出來上ります。

傘袋

傘袋と申しますと、普通雨傘の袋の事になつて居ります。當節流行ます布の日傘（コーモリガサ）は、昔から日本に有つたものでは無いからで、昔は御存じの通り、日傘にも矢張り紙製の物を使つて居たので御座います。布地は重に木綿で油箪と揃ひに致します。

一、名稱及び寸法

出來上りの圖

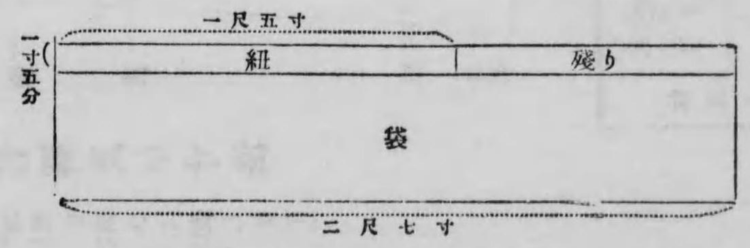


仕立上寸法	
丈け	二尺五寸
紋下り	同寸
口明け	八寸
巾（頭）	二寸二分
巾（口明）	三寸三分
紐丈	一尺五寸
同巾	五分

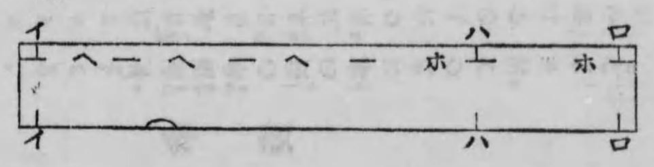
二、裁方及び積り方(標附)

1、裁方

用布　二尺七寸



2、標附



積り方と云ては別にありません。

總方

三、縫方

1、袋の造り方

是前に返します。頭は紋下りを計りさし た處で五つ口は口明けから紋下りの處まで耳と裁て有ります一つ目落しに縫ひますと、小物の紐の處に一つ目が雙になりますから目籠をしたまゝの形で巾の標の處を口明けから紋下りを計りさし伏せ縫ひに致します。折り目ですからずらし縫ひ目を結び梗に括ると申しますと、大きい針の處に一つ雙に委しく說明がし雙に括ります。

位置

表を手に巾を二つに折って紋の有る方を左手前に置ます。

イ、紋下り　ロ、丈け　ハ、口明け　ホ、巾の頭　ヘ、巾の口　ト、巾の處

襞の數だけ大きい針目を出して、其の間に女針を一つづゝ出して行き襞の折り目は紮けて置きます。口明けは油簞の馬乘の樣に三つ折り紮けにし口も同樣にして、口明けから口になります處は、木綿物の單衣の褄先きの樣に折ります。

2、紐の紮け方とつけ方

紐は出來上り五分巾に本紮けにして兩端を、矢張り頭の樣にして括つて置きます。紐の眞中を、口明けの標の處でわの方に宛て、左右へ一寸づゝ千鳥紮けで表からつけて置きます。

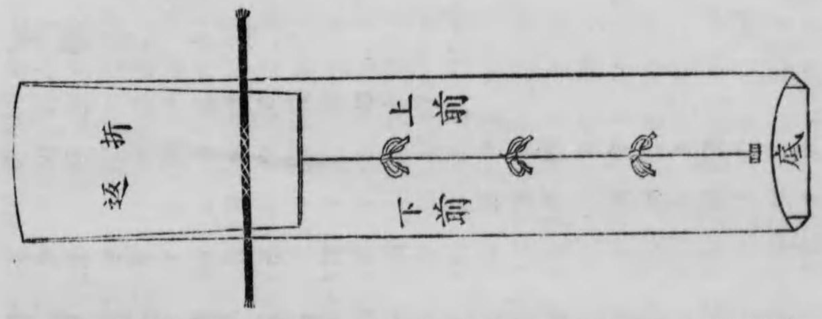
琴袋

琴袋は、流義に依つて其れ〳〵形が異つて居りますので、此處では、山田流と生田流とを分けてお話し致しまして、何處が違つてゐるかと云ふ事を、おわかりになる樣に申上げます。最も地質に依りましては、同じ山田流の袋でも飾りや、縫ひ方が多少違ひますので、上等物、並物と分けまして、上等物は、技巧を多く用ひますから、「特別な裁縫の研究」で、普段用ひます普御を此に申上げます。

一、山田流琴袋（普物）

普段に用ひます物は、全く實用的で唯琴を包むと云ふ丈けに止まり、袋その物を見るのでは御座いませんから、地質等も務めて美しいものや、弱い物等は用ひませんので、飾りと云ふものも用ひません、碇つて縫ひ方も上等物に比べて、やさしう御座ひます。

1、名稱及び寸法



出来上りの圖

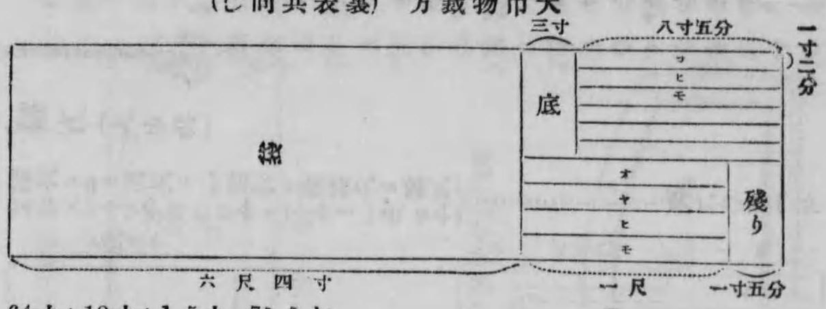
袋	丈け		いつばい
	巾		いつばい
底	巾		六寸八分
仕立上寸法	底丈（眞中）		二寸二分
		（兩端）	一寸三分
	親紐	丈	いつばい
		巾	一寸
	子紐	丈	八寸
		巾	八分
	子紐の位置（底から）		九寸五分〜
	力紐（底から）		四尺六寸
	親紐（頭から）		五寸
	カンヌキ留め（底から）		八分

2、裁方及び積り方

イ、用布（並巾）
- 大巾　七尺五寸五分（裏共）
- 一丈四尺九寸五分（裏表）

ロ、地質　メリンス　唐更紗　類紗

大巾物裁方（裏表共同じ）

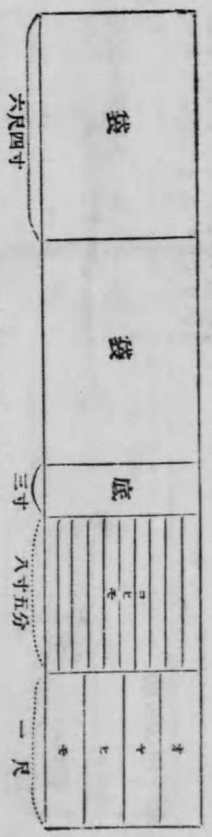


裁方

64寸＋10寸＋1.5寸＝75.5寸
袋丈＋親紐丈＋殘り＝總尺
又は
64寸＋3寸＋8.5＝75.5寸
袋丈＋底丈＋子紐丈＝總尺
……總尺の出し方

積り方

（共表裏）方裁物巾小



裁方

割り方

64寸×2＋3寸＋8.5寸＋10寸＝149.5寸｝……縫尺の出し方
袋丈×2＋底丈＋子紐丈＋親紐丈＝縫尺｝

3、縫方（大巾物）

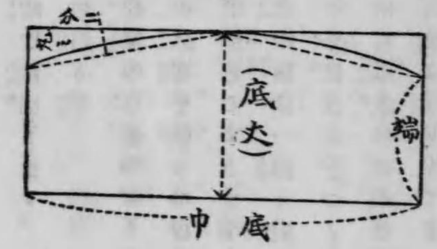
見返しの圖（裏より）

琴袋は、巾と丈けの筐を致しますが、表はいつぱいに、裏見返へは巾を表より四分狹くつけて置きます。

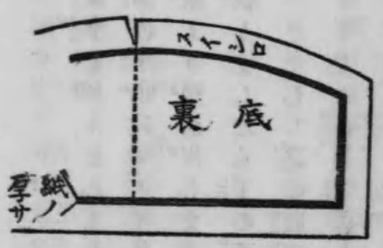
イ、袋の縫方

裏と表の巾の筐を合せて、兩耳を合せ縫ひにして、折りを裏へ返へしますと、表の方が圖の樣に一分づゝ廣くなります。（是れを見返へしと云つて、袋の左右頭とも皆見返へしがつきます。）左右が縫へましたら、頭の處は丈けの筐を合せてから裏の布を二分丈け差し上げて縫ひ、折りは同じく裏に返へし底の明いてる處から表を出しますと、左右の角は、廣衿の衿裏の先きの樣に、薙刀形になつて居ます。表から見返へしへ鏝をかけて、折りをつけましたら、底の方の丈けの標を合せて先きが不揃

底形を切る圖



底布を形に張つた圖（裏より）



の時は裁切ります。

ロ、底の造り方

一分位の厚味のボール紙で、圖の様な底形を切りまして、それに、表と裏の底布を張りつけます、張り方は、底形の厚味にソクイをつけまして、ずつとこすりまするとソクイが厚味より飛び出しますから、それを上の面に一週り鬚斗て、表の底布を張りましたら、下の面の廻りへ二三分置きにぽつ〳〵とつけずつと一なでして、裏の底布を張りましたら、厚味の處へは、裏の底布がつきます様に、表を下にして、裏から形の通り廻りをぐるりと鏝をかけますと、裏と表の底布が、びつたり張りつきます(糊張り物を致します時は、凡べて手早にする事を忘れてはなりません)次に二枚の張りつかつた布を一緒に、形通りに三分程大きく圖の様に裁ち切りますと、是れが底を袋につける時の縫込みになるので有ります。

ハ、底の附け方

出來上りました底の、丸味の有る方の、巾の眞中へ(底丈けを計つた處)篦を一つ致しまして袋の上前の表を底の表に合せ、眞中の篦を見返へしの峯とを揃へて、底の裏を見乍ら、袋は丈けの篦、底は三分の縫込をいつぱいに、本返縫で縫ひつけ、角は廻し縫ひにして、眞中の篦の處まで、一廻り縫ひましたら、下前をかまわず、上前の向ふ側に重ねて、打ち重なりだけを、もう一度本返縫に致します、折りを袋の方へ返へして、表を出し、角へ鏝を當てますと、恰度木綿糸一本位の高さだけ、袋が底の上に出ます。

ニ、紐の衝け方

紐は、親紐一本と、子紐八本を衝けます。

子紐は、三分巾の出來上りに、本衝けにして、片方の頭だけを、四角に折り、他の一方は裁切りのまゝにして置きます。

親紐は、丈けを三處割はぎにして、兩頭を縫ひ巾一寸の出來上りに本衝けに致します。

ホ、紐のつけ方

紐をつけます前に、底から八分上つた打ち重なりの處へ、二分位のカンヌキ留めを致します。

紐は、出來上りの圖に御座います通り、底から九寸五分づゝ三處に、子紐を六本つけ、後二本の子紐は、底から四尺六寸(三つ目の子紐から一尺七寸五分)の處につけます、是れを特に力紐と申して居ります。つけ方は凡べて、縫目を上に向け、上前は折り目から三分の深さ、力紐だけは三寸五分の深さ、下前は打重なりから三分の深さに、つけ紐の時と同じに縫ひつけますが、別に飾り縫ひは致しません。

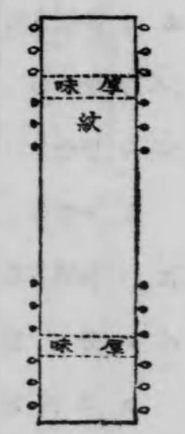
親紐は頭から五寸の處へ、縫目を底の方に向けて、巾の眞中から(折重なりのと反對の方)左右へ二寸五分づゝ、五寸の間を細かに紐の兩端をすくひ伏せにして、紐巾いつぱいに其の上へ、紅の絹糸を二重にして、千鳥綴けを致します。

二、生田流琴袋

山田流の時は、普通物と上等物と、二種に分けてお話致しましたが、生田流の袋は、山田流に比べますと、ずつと簡單で御座いますし、餘り粗末な物は見受けませんから、一般に用ひられてますのを、一通りお話致します。其の上各自でどの樣に御工夫なさろうとも、まだ手を省かれ樣と、それは自由で御座います。

1、名稱及寸法

出來上り圖



	袋丈け	同巾	紋の位置	一のわか	二のわか	三のわか	頭の厚味	一の釋迦
出來上り寸法	八尺	八寸四分	二尺八寸（頭から紋の中心まで）	一寸（頭より）	六寸三分五厘（一のわかより）	六寸三分五厘（二のわかより）	二寸三分	三寸三分（三のわかより）

2、用布及地質

イ、用布　並巾物、八尺六分（表、裏共）

ロ、地質　縮緬、鹽瀬

表は、淺黄か紺に、紋の位置の處へ染模様をつけます。

裏は、緋の無地へ、金糸の縫紋をつけます。

裁方積り方は、帶の時同樣、用布をそのまゝ用ひますから、別に記す事は有りません。篦づけをする必要は有りませんから、直ぐ縫ひにかゝります。

3、縫ひ方

イ、紐（正束）

此の紐は、飾りと云ふ意味では無く、唯布の合せ目を留めれば宜敷いので、普通は、細い絹の打紐を用ひます。わかと釋迦で一組の物を、十二組入用ます。（結び方は小物科參照）

ロ、つけ方

つけ方は、袋を縫ひます時、寸法表に有る寸法で、表と裏の間へ挾んで縫ひつければ宜敷いので御座います。

つける位置を委しく申しますと、一のわかは頭から一寸目の處で、二

のわか、三のわかは、六寸三分五厘づゝ間を置いて、つければ宜敷いのです。そうしますと三のわかは、折れ目から丁度一寸目になりますから、折れ返つてる處だけへ、一寸づゝ入つた處へ一つづゝ、其の中央へ一つ、都合三つゝく樣になります。

釋迦は此のわかと、向ひ合つてさえ居れば、宜敷いので、琴の厚さをのぞいて、同じ寸法につけて行けば、ぴつたり合ふ譯けで有ります。是れが、上下の折り返へりへ左右三組宛つけますから、全體で十二組になります。

八、袋の縫ひ方

紐を挾ひ位置がわかりましたら、表と裏を、表中に合せて、四方の紐を間へ挾みながら合せ縫ひに致します。（わかは縫目から三分、釋迦は きつちりにつけます）此の時縫のどちら側でも、五寸程明けて置きまして、此處から表へ返へし、直ぐ衍けてしまひます。折りは、毛抜き合せに裏で手折りにして、表へ返へしてから、鏝仕上げを致します。

此の外只今は餘り流行りませんが、正束で袋を挾む樣なつけ方も御座いますが、是れはわかも、釋迦も、紐の先きを結び切りに致しませんで、濟憲なり何なりに又結んで置きます。こうしてつけますと、裏面なしに使えますが、正束の方で、紐が澤山入りますから、矢張り間へ挾む方が便利で御座います。（松戸左中述）

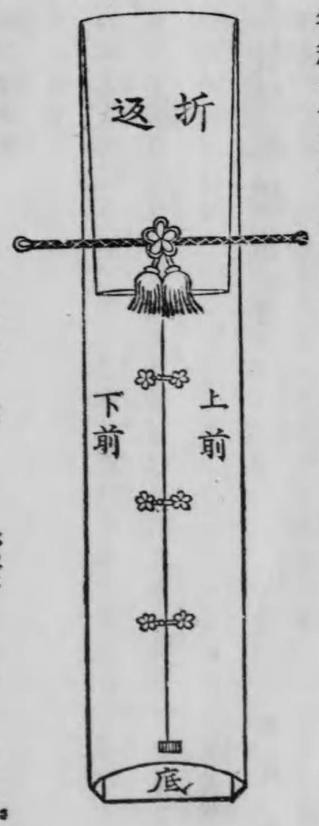
上等物琴袋（山田流）

普物の琴袋が實用的としますれば、上等物は寧裝飾的で御座いますから、何處までも、一つの美術品として考へて差支え有りません、それだけ、手際を要し

ますのも當然の事で御座います。

1、名稱及び寸法

出來上りの圖



寸法は、唯紐のつきます位置が、紐でなく裝束になりますので、左の樣に替りますだけで、後は並物と同じで御座います。

小さい裝束(子紐の替り) 底より計つて九寸五分づゝに致します。

大きい裝束、頭から房が三分出る處につけます。

2、裁方及び積り方(縮附)

イ、地質、緞子、鹽瀬、縮緬類

ロ、用布は普物より、親紐と子紐六本分だけ少くて宜敷う御座いますから、袋、底、子紐二本分有れば宜敷いのです。從つて、積り方も其の樣に致します。篤は並物の時同樣、巾を表の方だけ四分廣くして、後は丈けをつけて置きます。

3、縫方

イ、袋の縫ひ方

袋は上、左右の三方を、篤通りに合縫ひに致しますと表の見返へしが一分になります。折りを裏へ返へして下の明いてます處から表へ引き返へしますまでは、並物と同樣です。袋の丈けを揃へましたら裏表一緒に二分の切込みを、一寸五分置きに入れて置きます、是れは、底をつけます時の、合印の替りで切込みを入れましたら兩端の巾の縫目を、下から一尺程解いて置きます。

ロ、底の造り方

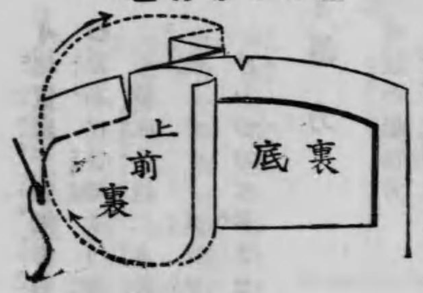
底は形の切り方から、底布の張り方まで、皆並物の時の様にして造らへて變りは有りません。

ハ底のつけ方

並物の底は、束につけて御座いますから、出來上りましても、裏には縫目が見えて居りますが、上等物は、底の縫込みを、袋の布の表と裏の間へ挾みまして、四つ縫ひに致しますから、つけた處が出來上つてからでも、見える樣な事は有りません。

底の巾の眞中へ、丸味の有る方で、並物の時同樣標をつけて置きました

底のつけ方圖(一)

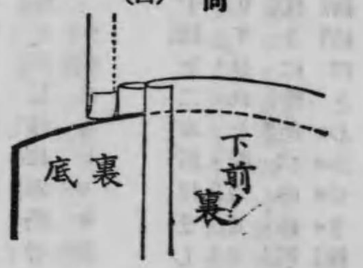


同(二)

ら、其の標の處へ、袋の上前の端を表は表、裏は裏に合せますと、袋の布の間へ底の縫込みが挾まつてますから、そのまゝ袋の布で底を一廻りして見ますと、下前が眞中の標より、何程長いかと云ふ事がわかります、其の長い丈けが打ち重なりになりますので、打重なりに二三分加へた處から先きの、上前を眞中の標まで、本返しで四つ縫ひに致します。(縫始めは、裏の巾が五分引けてます)眞中まで來ましたら、打重なりの左の端(下前の見返へしの峯の處へ、底形から五厘位の深さまで(二分五厘)底布と包んでる上前とを四枚一緒に一圖の樣に鋏を入れます、上前の裏布を、二圖の樣に鋏を入れた處か

同(三)

同(四)



表の上前と重なる樣に返へしますと、打ち重なりの處だけの、底の縫込が三圖の樣に立つてゐますから、下前の表を向ふに、裏を前にして、四枚合せて本返縫にします。打ち重なりは、下前の見返へしまでゝ有りますから、四圖の樣に裏の折りだけを縫ひつけ、表は見返へしの峯までつけて、表の見返へしを折るから、裏と表とを合せて、先き程解きました一尺の間を、本返縫の糸を切らずに置ゐて本衍けに致します。下前が出來ましたら、上前も衍ける許りに、裏表が合つて居りますから解きました處と、同じ樣に本衍けに致します。底から八分の打ち重ねた處へは二分程のカンヌキ留めを致します。

二、裝束

紐は、並物と同樣に子紐を二本衍けまして、後は衍けずに打紐の結んだのを代りに用ひます、是れを裝束と申します。

裝束は、子紐六本の代りに梅結びの直徑一寸三分位のを、三組用ひます（一組は、釋迦つき梅結びとわかつき梅結びとの二つから出來て居ります）

親紐の代りには、梅結びの直徑四寸程の、房のついてますものに、左右へ二本の同じ打紐が出て先きへ、わかと、釋迦がついてますのを用ひます。

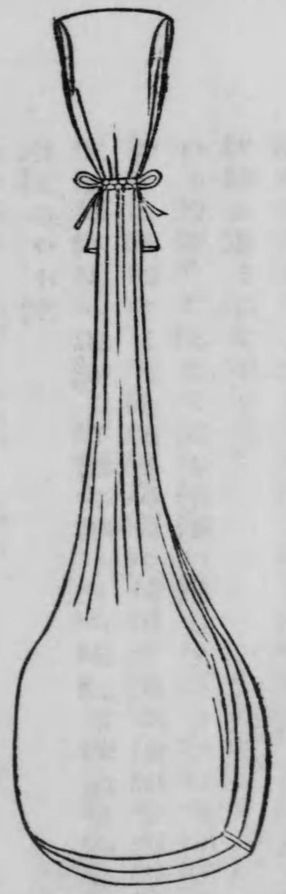
裝束のつけ方

三組の小さい梅結は、子紐の時より五分上ですから、底から九寸五分づゝに釋迦つきを上前に、わかつきを下前に、並物と同じ位の深さにつけます。二本の子紐は、力紐と申しまして、底から四尺六寸の處へ並物の通りにつけます。

大きい梅結びは、房が頭の先きへ、三分出る位の處で、袋の巾の眞中へどちつけますが、結んだわが大きう御座いますから、一本如にどちつける糸を切つてしまひます。（出來上り圖參照）（中山喜一述）

三味線の袋

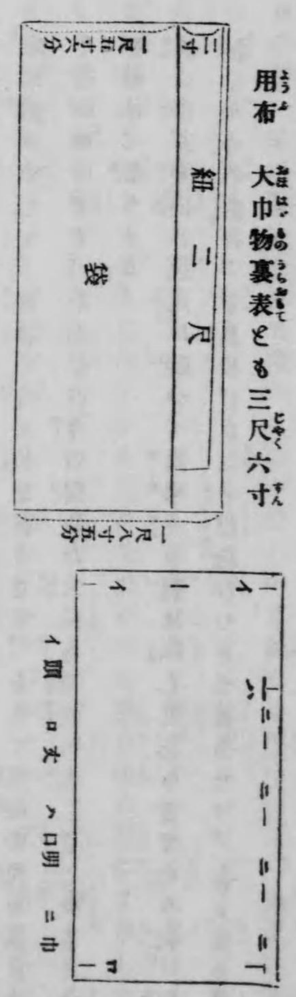
出來上り圖



寸法	
胴直徑	五寸
含み	一寸六分
丈	一尺五寸七分
折返し	八寸
口明	八寸
紐丈	二尺
紐巾	五寸

一　裁方及標付

用布　大巾物裏表とも三尺六寸



表布の一端から紐だけを裁ちます。あとが袋となる布で裏布は表を同じ巾で同じたけに裁つて置けばようございます。

二　縫方

筺付は表布を圖のやうに中央から二つ折りにしまして、イからハまでの口明の筺をつけましたらあとは丈、巾、頭の標をつけて置きます。

頭の筐イからイまでの間を裏表二枚の布を合せて縫ひましたら、折は裏へ折つて、表を二分裏へ見返します。次に兩方の竪を口明の處イからハまで八寸裏表二枚づゝ縫ひましたら、兩方の竪の處を四枚袷の口止めをするやうにして止めます。四枚一所に五寸程縫ひ下りましたら、そこから裏表別々に縫ひます。裏布は二枚だけを三寸程縫ひ殘して裏まで縫ひましたら、裏表の兩角を、裏は裏、表は表だけ二寸五分の厚味に縫ひまして、皆裏の方に折を折ります。そして厚味の角を裏と表と縫ひつけます。そして三寸の開いた穴から布表へ返しましたらそこを衍けて置きます。

紐は巾五分長さ二尺に縫つて出來上り圖に示してありますやうに、折返し八寸の處に、千鳥掛けに二寸位縫ひつけて置きます。（松戸左中通）

附錄

四　薄物の衿肩留め

夏の暑い時は、薄い上にも薄いものがほしいと誰でも思ひます。出來る事なら、何も身に纏はずに居りたいと思ふ位です。それ故涼しいと云ふ感じを持たせるのは、着物を着る上から云つても、是非必要な事ですから、下に着けて居る物が、透き通つて見えて、涼しさあらはす爲めには、單衣物の肩當と申しますものを出來る事でしたら、用ひずに置きたい位なのであります。薄いと申します方から考へても、二枚の布より一枚の布の方が薄いのは定て居ります。けれども、全然肩當を着けませんのは、仕立の上からも、經濟上からも、決していい事ではありません。そこで成る可く小さい布を當てる工夫をした上から考へ出されましたのが此の衿肩留めです。これには次に申上げます。二種の外にも澤山變つた致し方が無いのではありませんが、この二種のものが今世間で多く實行されて、好評がありますので、それを述べる事に致しました。最も是れは粋向の方が多くなさいますもので、從つて縮緬、結城等は是れでな

くてはならない樣に申されて居ます。

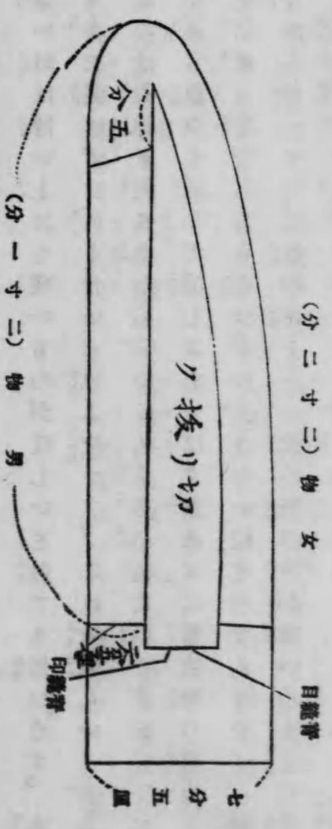
三日月形衿肩留め

1、地質　普通表地の端から共布を取つて用ひます。

2、用布　縱地(丈)一寸二分、横地(巾)五寸二分。

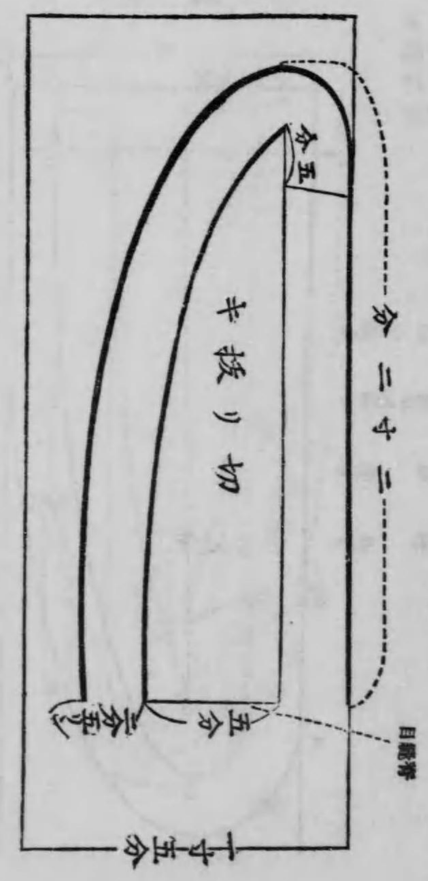
3、裁方と標附

本形



最初丈夫な厚紙で出來上りの形を切りますが、全體の形を造りますと、男物、女物、櫛形等と幾種類も造らねばなりません故大きい物ではございませんから、それを半分に切つて實物大の物を圖に出して置きます。

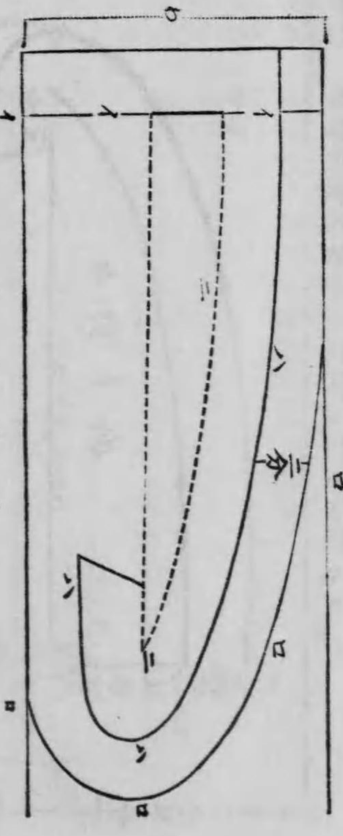
櫛形



男物にも女物にも使はれます。櫛形は襟を抜いて着る仕方で、女物に限られて用ひられるので、形も違ひます。造り方は、用布全體の二分の一の厚紙の上へ、本形の圖を上せて、其の通り裁ち切ればよいのです。

どの様に大きい衿肩の場合でも、中心を端から計つて、替えさえすれば出來ます。櫛形の時は櫛形をあてゝ切ります。

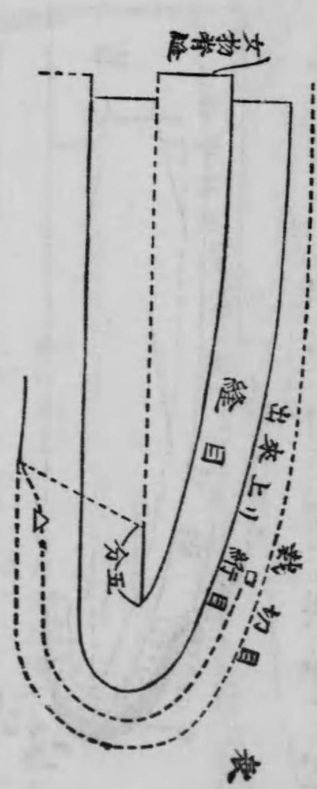
一圖



型が出來上りましたら、一圖の樣に用布を中央から横に二つに折り、背縫標をし、其の印の上へ、本形の背縫印を重ねて、印をつけましたら、□印の裁切から切落します。

4、縫ひ方

二圖

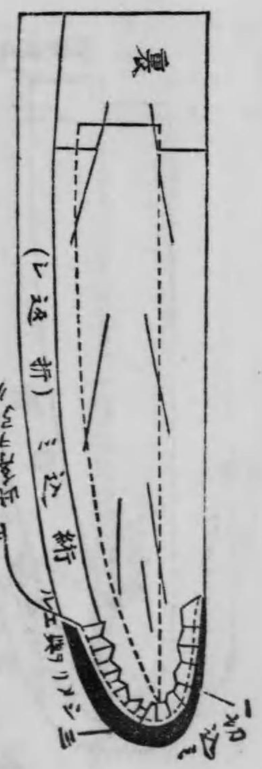


共色羽二重糸にて、二圖の□印から△印までを細かに縫ひ、糸を二寸計り殘して切り、布を裏返します。縫ひました間丈け、一分置きに極く一寸切り込みを入れて、其の糸を引きます。此の時三圖にある通り、本形

薄物の衿肩留め

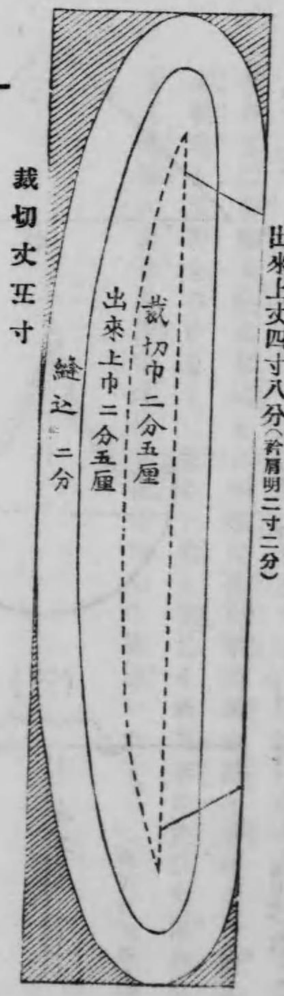
を上に置いて、七本の待針をして、動かさない樣に留め、糸をメめた處へ霧を吹いて濡らせます。次には鏝で縫込を折り返し、形の崩れない樣に充分力を入れて仕上げを致します。兩方の丸味が出來上りました

三圖

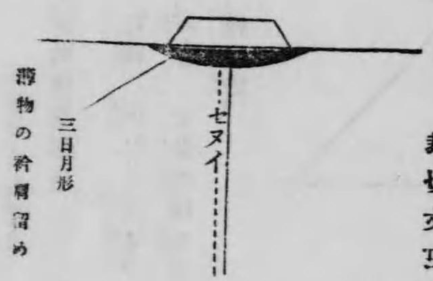


ら、五分の切込みから前を切り落し、一圖のハ印を折つて身頃へ當て、隱朕をして、前と同じ糸で、一分足にし衿けつけます。衿つけの印へ衿がつくと、裏衿のキセ掛けがありますから、二分弱の出來上り巾で、大變格好の宜しいもので御座います。

全形圖



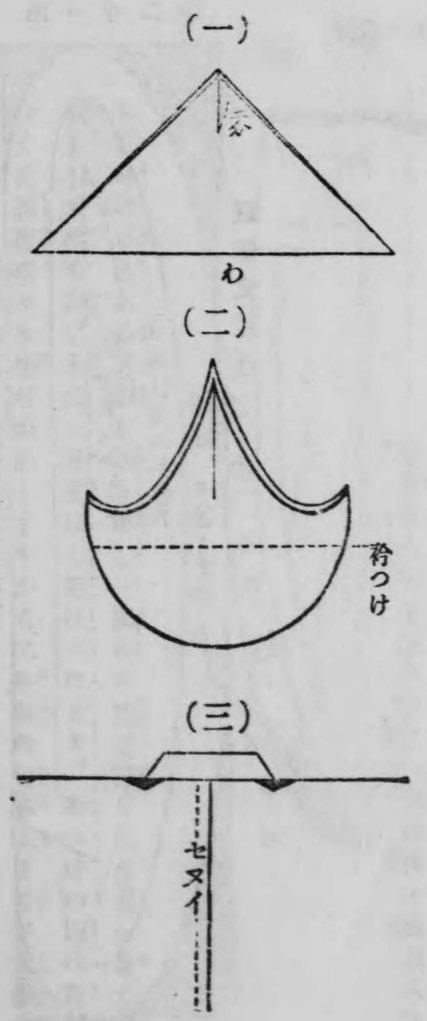
衿肩へ取附ケタル圖



前に申上げました櫛形は、三つ衿の縫込みが五分になるので、縫目印を身頃に通して、衿つけをするのが便利です。

銀杏形衿肩留め

1、地質　同じく共布。
2、用布　七分巾四角二枚。
3、裁ひ方。



四角の布を一枚表を外に三角形に折りまして、山の角から二枚一緒に

二分切り込みます。わの方は鋏で、引伸すと、(二)の様に、銀杏形になりますから、二分切り込んだ處を(三)の様に衿肩明の端の處と重ねて、一分五厘程出して衿をつけます。他の一枚も同じく銀杏形に造つて置きますと兩端が出來る譯で誠に手輕で宜しう御座います。

（飯野茂三郎述）

五、衣紋を抜く着物の仕立方

衣紋を抜きますには、唯召します時に、三つ衿を後へ去らせた位の事では、直ぐ又被つても來ますし、格好よく抜けるものでも有りません。是れは是非共縫方の時に、普通に肩にかけても自然に衣紋の抜ける樣に縫はなくてはならないので、其れには左の二種が御座います。

櫛形づけ

此れは、衿のつけ方で、衣紋を抜かせます仕立方で、衿肩留めの處に有ります櫛形を用ひて脊の縫目を深く縫ひ込み三つ衿をくれば宜敷いので御座います。（最も紋附等の場合は衿山の縫込みを深かく致しますと紋下り寸法が違ってしまひますから眼め染めにやります時注意するか他の縫ひ方を用ひます）

後身頃に揚げをする

男物の揚げを致しました樣に後身頃に肩の山印が後に繰り越されただけの寸法を揚げにします。普通は此の繰越を五分として、五分揚げを摘んで居りますが、人間の肩の厚味は、一寸五分有るのが、中肉の人の寸法ですから、其の半分の七分五厘を繰り越すのが理屈上正統なので有ります唯寸法が覺え憎くいのと、少しの違ひで差支えにもなりません爲め、前に申上げました五分と云ふのを一般に使つて居ります。

1、篦づけと縫ひ方

篦は普通の着物の時と同樣に、後身頃を上に前を下に重ねまして山印と丈けの標を致しましたら、山印から、袖附身八つ、それから一寸下つた處に揚げの篦と五分の摘みにして一寸と致します。揚げと摘みの篦を合せますと、後丈けが一寸短くなりますから肩で前布を五分見える樣にし後身頃を右に動かしますと裾が揃ひますから、改めて其の肩の折りから、袖附身八つを計り前布まで通してしまひますから、揚げの位

置は下身八つより一寸下がつて最初計りましたが出來上りは一寸五分下がつて居ります、そして疊みます時に此の縫方を致しますと衿肩明が平に折れません。

（是れを唯袖附だけて前を五分多くつけ肩を縮つて置くと疊む時は宜敷うございますが着ます時に後身八つにたるみが出來ますからどうしても直きに衣紋が崩れます）。

縫ひ方は男物の揚げ同樣に後巾に左右一分加へた丈けの處を縫つて下に折りを返へし、脇を下身八つの標（前を繰り越してからつけた標）まで縫つて、男物の時の樣に開いてとぢて置きますと後は普通の縫方と替りません。

此の外長襦袢の下りを揚げなしでつけました樣に繰り越しも揚げでなく裁方の時衿肩明を後と前の中央より五分後身頃の方へ寄た處で鋏を入れますと揚げをしなくも繰越がついて居りますから裾を揃へて篦をすれば宜敷御座います。（但し是れには櫛形の時同樣の注意が必要です）

（飯野貫三郎述）

着物を羽織になほした時の衿の附け方

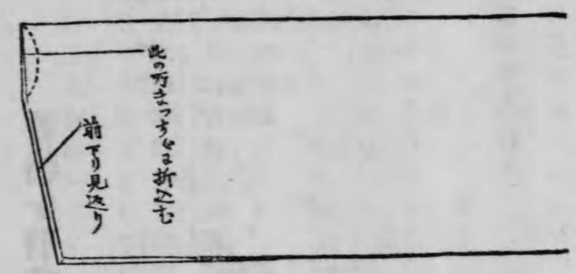
着物を羽織になほす時は、前を裁ち落せば普通の羽織と同じになりますが、これでは次に再び羽織になほす時前巾が狹くなります。それで衿で裾と袖口を取り、衽を二枚はぎ合せて衿といたし、前巾は其のまゝ裁ち落さずに置く方が經濟であります。しかしかうなりますと衿附の縫込みが多くなりますので、自然衿の折工合がよく行きません。それでかやうな時は次のやうな仕方で附けると、普通に前を落したと同じやう手際よく出來るのであります。

イ　前下りの縫方

普通に篦附けをして胴はぎをしましたら、前下りを縫ふのですが、此の時下りを前巾かつきりの所まで縫ひ、決して巾いつぱいに縫つてはなりません。前下りが縫ひましたら、表へ返し、縫ひ終りから前巾の

縫込みを、次の圖のやうにまつすぐに折り込むのです。但し此の所はたゞ折るだけで縫ふのではありません。

前下り縫上りを裏より見た圖



□ 衿附

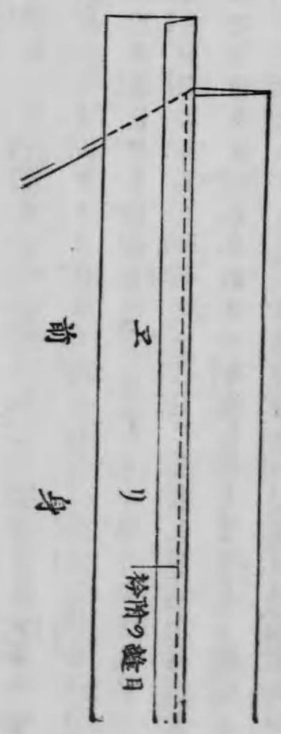
前下りが出來たら襟を普通につけ、綿入ならば綿を入れたのち衿附にかゝります。此の順序は普通の羽織と少しも違ひません。

さて衿の布は牛巾になつて居りますから一寸考へると是非衿芯の必要があるやうですが、前身の縫込みが澤山ありますので、芯を入れると餘りごて〳〵として工合よく行きません。それ故衿芯は胴裏の所へだけ入れ、外の部分へは入れません。胴裏の前巾

裁ち落してあるものと見ますと、其所だけ一枚布が薄くなりますからそれを補ふために入れるのであります。

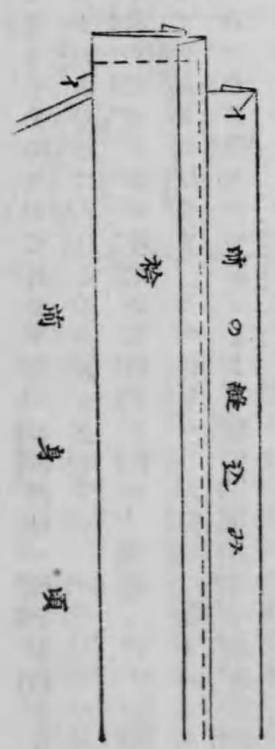
先づ衿の用布を巾の片端から四寸と當り、其所へずつと丈全體に布裏向けて折目をつけます。この折目の方が衿附になるのですから、地質の痛みや色の褪めたのなどをよく調べ、なるべく綺麗な方が衿附に廻るやうにすることが肝要です、次に今つけた折目の奥を二分か三分の縫代にして身頃に普通の衿附けと同じ加減で附けます。かうすると衿附の方は布が二重になる筈です。(衿附の圖參照)

衿附の圖



衿が附いたら衿先きを縫ひ折をかけて縫込みを一針とめます。次に衿巾出來上り寸法より一分ほど狹くして、前落し縫込みを衿の附いて居る反對の側に折り込みます。すると次の圖のやうになりますから、先づ衿先を表に返し、衿布の「イ」の角に前落し縫込みの「イ」がかつきりと當てはまるやうに行きつかせて衿先を作りますと、澤山ある前の縫込みが少しも邪魔にならず、普通の衿と同じ恰好に出來るのです。次に前云つた通り胴裏の部分へだけ一重しんを入れて衿を繕ければよいのです。

衿先の圖



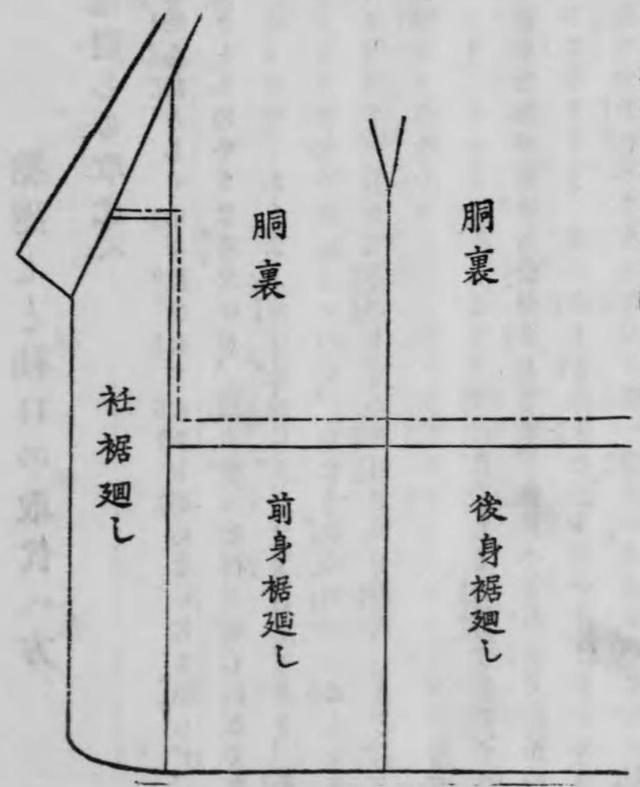
一　裾廻しと袖口の取代へ方

着物全體として未だ縫ひ直す必要を認めないにも係らず、袖口とか裾吹きとかのやうな所だけが、烈く摺り切れて着られなくなることがよくあります。かう云ふ時は全體は其のまゝにして置き、袖口布と裾廻しだけを取代へればよいので、つまり局所的縫ひ直しをすればよいのであります。しかし裾廻しとか袖口とかを取代へると云ふと、非常に面倒なものゝやうに思はれ、大抵の方がこれを憶劫がつて居られるやうです。しかし順序を逐つてすれば少しも面倒な仕事ではないので、普通の仕立が出來る位の人ならば、誰にでも容易く僅かの時間で出來るのであります。其の直し方は次の通りにすればよいのです。

裾廻しの取代へをする時は、第一番に今まで附いて居た裾廻しの丈の寸法を計ります。次ぎに身頃全體を、裾廻しと胴とのはぎ目の二三寸

上で次ぎの圖のやうにして束にとぢ附け、裏と表が離れぬやうにしてから、裾廻し布をとき離します。

表と裏を束にとぢ附けた圖



裾廻しを離しましたら、新しい方の裾廻しを古い分と同じ長さになるやうに裁ち（此の時相當の縫代を取つて置く方が、今度其の裾廻しを上下にすることが出來て便利です）表の身巾に合せて、背縫、脇縫、衽附をします。それ〳〵折をきせたのち、表と合せて裾合せをします。そしてすぐに褄を揚げて裾の横とぢをしました、背や脇の中とぢを表と裾廻しとはとぢ合さつた形になります。

以上が出來ましたら、裏を上側にして平に据へ、裾廻しの丈けの縫ひ込みを、胴裏の下へ押し込んで重ね、荒くしつけをかけます。これを一寸衣紋竹に吊して見て、裏表に弛み張りの有無を調べたのち、細かく絎けます。これで後と前の身頃は出來上りましたから、次ぎに衽の殘りを縫ひつけるのです。先づ衽先の裏と衽裾廻しとをはぎ合せ、前身胴裏へ縫合せます。

次ぎに褄下と衿先のほどいた部分を絎ければ全部出來上つたのです。

但し衽を四つ縫ひにつけた袷などは、前のやうな仕方では出來ません から、矢張り衽を四つ縫ひにつけねばなりません。それは最初裾廻しの背と脇だけを縫つて裾を合せ、中とぢをしましたら前の通りにして胴裏とはぎ合せます。別に衽の裾合せをし、新しい時と同じ縫方で裏表の衽を四つ縫ひにつければよいのです。

二　袖口の取代へ方

袖口の取代へは裾廻しに並べるとずつと簡單に出來ます。先づ袖口先きの四つ止めと絎けた糸とをといたのち、古い袖口の布を取りはづします。次ぎに古い袖口布の巾をはかり、それが假りに二寸あるとしますと、新しい袖口の巾を二寸二分として篦なり折なりをずつとつけ、袖裏の方は前の袖口をかけた縫目より一分奥といたし、其所へ此の折りの通りに袖口をかけるのです。これが出來たら袖口のくゝみ綿をして袖口を絎ければよいので、何の難作もなく出來上ります。

五　男物袷羽織積り方

用布、三丈物。出來上り寸法、袖丈一尺四寸、身丈二尺七寸、乳、脊から一尺一寸、前下り一寸。

袷羽織の、裏表の總用布尺を知るのには、袖丈を出來上り寸法で八倍して、身丈を十倍にします。それに二尺五寸を加えたものが、裏表の總用布尺です。裏表で四丈一尺二寸です。これから、表用布の三丈を

引きますと、殘り一丈一尺二寸です。これが胴裏の用布尺になります（縫込のあるもの）。袖丈を八倍したのは、裏表の袖八布です、身丈を十倍したのは後前裏表八布及び衿二た布です。これに二尺五寸を加えたのは縫込尺を入れたのです。（この二尺五寸は袖丈縫込の五分づゝ八布で四寸、繰越二分の八倍の一寸六分、身丈篦付に要する脊の衿付縫代三分と縫づまり一分と加えたものゝ匹分の八倍の三寸二分、前下り篦付寸法一寸二分に下り先の縫込一分を加えた一寸三分の四倍の五寸二分、衿先縫込一寸の二倍の二寸以上一尺六寸の餘り九寸が裏表八布の胴はぎの縫込になるのです。胴はぎ縫込は一と布一寸一分づゝです。表布から袖丈と衿丈とを取つた殘りは身頃になります。衿丈は、衿肩明の二寸七分、肩山繰越二分の二倍の四分、脊から紐付迄のゆるみ一分五厘、衿先のゆるみ五厘、前下り篦付寸法の一寸二分、衿先縫込の一寸、以上の和の五寸五分を、身丈篦付寸法二尺七寸四分に加えて、その二倍の六尺五寸八分を取ります。殘り一丈七尺六寸一分です。これが身頃後前四布になります。身頃後前をきめるとき、羽織は、前身を長くしますから、前長寸法を入れてから衿肩を明けます。前長寸法は、衿肩繰越二分の二倍の四分、前下り縫込とも一寸三分の和の一寸七分だけ長くします。前長寸法をこれだけ取りますと胴裏のはぎ目は後前同じ位置になります。しかし羽織の胴はぎは前身の方を高くした方が面白味がありますので、前胴はぎは普通後胴はぎより高く上げます。その仕立方には二た通りあります。その場合に前長寸法一寸七分をその七寸から引きますと、五寸餘り後胴はぎより前胴はぎの方が上かることになります。その二は、前胴はぎを、紐付と同じ位置にします。これは、身丈篦付寸法の二尺七寸四分に前長の一寸七分を加えて、それから繰越二分を引きますと、二尺八寸九分になります。紐付は、脊から一尺一寸ですから肩山からは八寸一分です。この八寸一分を、二尺八寸九分から引きますと、二尺八分になります。これに胴はぎ縫代の三分を加えます

と、二尺一寸一分になりますから、この寸法だけのものを前丈の裾から折り上げますと、紐付の位置と胴はぎの位置と同じになります。前落しからけ　し切と裾丈とを取ります。

六　袷半コート積り方

用布、三丈物。出來上り寸法、袖丈一尺六寸、身丈二尺八寸、衿肩明二寸八分、胸明五寸五分、前下り一寸。

半コートは、七分形といふのが一番流行します。この七分形は丈が二尺八寸です。假りに羽織の丈二尺六寸としますと、二寸長いわけですこの七分形の積り方は、着物身丈四尺(着丈ではありません)を七寸してそれを十分しますと二尺八寸の丈が出ます。裏表の入用尺を積るときは、袖丈出來上り寸法に五分の縫込を加えて八倍したものと、身丈上り二尺八寸に一寸五分を加えて十倍したものとが裏表の總用布尺で、已丈二尺七寸になります。これから表用布尺を三尺引くと胴裏の入用尺が出ます。胴裏は一丈二尺八寸です。表布から袖丈を取り、立衿を取つた殘りが身頃四布になります。袖丈を引いた殘り二丈三尺四寸から立衿を取ります。立衿は、身丈筐付寸法の二尺八寸四分に、繰越の四分及び前下り出來上り寸法の一寸を加えた二尺九寸八分から小衿下りの六寸八分を引きます。(小衿下りの六寸八分は、胸明五寸五分、背の衿付縫代三分、繰越四分及び小衿巾の六分です)。小衿下りを引いた殘りは二尺三寸ですが、小衿は下り氣味になるものですから、立衿を小衿下りの寸法より一分縫ひ上げて付けます。これで二尺三寸一分になりますからそれに小衿縫代の五分五厘を加えます。さうすると立衿は二尺三寸六分五厘といふことになつて、小衿付の縫込だけのあるものになります。立衿裾の縫込はないもの)。この二倍のものを、二丈三尺四寸から引きますと殘り一丈八尺六寸七分になります。これから更に前長寸法を引きます。前長寸法は、繰越四分の二倍の八分、前下り一寸三分(下り先の縫込一分あるもの)との二寸一分を後身より長く取る

のです。（コートの方は後前の胴はきを同じ位置にしますから、前身は前長寸法だけ、丈を長くして置けばよいのです。身頃は前長の二寸一分の四倍の八寸四分を引いた餘り尺一丈七尺八寸三分が身頃後前四布になるのです。前身の方は前長の二寸一分を加えます。初めに身頃に一寸五分を加えて十倍した其の一尺五寸と、胸明五寸五分の内三分を背の矜付縫代に取り、餘り五寸二分を二倍した其の一尺四分とを加えますと、二尺五寸四分になります。この二尺五寸四分が、前長寸法二寸一分の四倍の八寸四分、立矜下の縫込及び身頃胴はぎ四ヶ所の縫込になるのです。立矜には後に丈長くする場合の用心に縫込をすこし多く入れておきます。この縫込は一ヶ所二寸餘りになります。前落しからは、袖口切の七寸五分の四倍、小矜丈三尺及び裝束切の一尺三寸を取ります。

七　男物單羽織積り方

用布、二丈七尺七寸四分、出來上り寸法袷羽織と同樣。

袖丈に一寸の縫込を加え、それを四倍して總用布から引きます。矜丈は、身丈出來上り寸法に五寸五分を加えて二倍したものをその餘り尺から引きます。殘り一丈五尺二寸四分となります。これから前むだを四寸取りますからその二倍の八寸を引くと餘りが一丈四尺四寸四分になります。これが後前の身頃です。前身の方には前むだの四寸を加えます。この四寸には前長の繰越二分の二倍の四分と前下り篦付寸法一寸二分との一寸六分が含まれてゐます。單衣羽織は分丈が少ないのですから前身は前長寸法だけ長くしたのでは、前落しから袖口切の九寸の四倍と襠丈一尺三寸六分の二倍とをとるのに丈が不足するからです身頃篦付寸法の餘り尺は裾返りになります。女物の方は、袖付が少ないもの故、從つて襠丈が長くなりますから、前むだは六寸五分取ります。

八　女物單衣半コート積り方

用布、二丈六尺五寸、出來上り寸法袷コートと同樣。

單方コートは、大抵羅で仕立てますから、立衿は半巾で付けます。そして裾を身頃と同樣折返しておきます。それで立衿は、布巾一と丈あればよいのです。

袖丈に一寸の縫込を加えて、それを四倍したものを總布から引きます と餘り一丈九尺七寸です。立衿は、身頃篦付方法に、繰越の四分、前下り出來上り寸法一寸とを加えたものから小衿下りの六寸八分を引きそれに立衿縫上げ一分を加えて、なほ小衿付縫代の五分五厘とを加えたものが、小衿縫代のある立衿篦付寸法です(裾返し尺のないもの)。この丈は二尺六寸五分ですから、右の餘り尺から引くと、殘り一丈七尺五分になります。これが身頃になるのです。これから前長の二寸の二倍四身を引きます(前長は繰越四分の四倍の一寸六分と前下り篦付寸法一寸二分の二倍の二寸四分の四寸です)。前長を取つた殘り尺一丈六尺六寸五分を身頃後前四布にします。身丈二尺八寸四分を四倍したものを一丈六尺六寸五分から引くと、餘り五尺二寸九分になります。これを五寸すると、立衿、身頃の裾返り丈が出ます。コートの裾返り巾は羽織より尠なくして、一寸五分位にします。前身の方には前長の二寸を加えて衿肩を明けます。前落しからは、袖口切、小衿及び裝束切をとります。

(をはり)

袴の積り方

袴の積り方は、既に袴科に於て裁方と共に申述べてありますが、それは襠丈や後丈前丈などを何尺何寸と假定したうへ、用布全體の寸法を割出した積り方であります。こゝでは用布の在尺を元とし、例へば二丈五尺の用布がある時は、後丈や前丈は何尺何寸に積つたらばよいかと云ふやうな、つまり早積りの仕方を申し上げるのであります。

1 片面物並巾物にて普通襠の前布と後布の割出し方

これの積り方を先づ式で表はしますと次の通りになります。

在尺－(襠丈及びムダ×2)－(腰板布×2)－(前布丈と後布丈との差×4)＋(後布先の裾切上げ＋後奥布裾切上げ＋前脇布裾切上げ＋前奥布裾切上げ)－換腰板布＋8＝前布丈

前布丈＋(前布と後布との丈の差)＝後布丈

襠丈は紐下寸法の三分の二から、相引高さと前切上りを引いたものです。

腰板布の寸法は三寸です。

前布丈と後布丈の差は二寸です。

後布先の裾切上げは三分。後奥布裾切上げは一寸一分。前脇布裾切上げは七分。前奥布裾切上げは八分と定つて居ります。

換腰布は四寸取ります。

の丈を十分に取るためです。

尚ほ何故ムダ布を取るかと云ひますと、前紐

2 同上の用布にて前脇布丈と前奥布丈との割出し方

これも式に表しますと次の通りになります。

(前丈×4)－(前奥布丈と同脇布丈との差×2)＋4＝前奥布丈

前奥布丈＋(前奥布丈と同脇布丈との差)＝前脇布丈

前奥布丈と同脇布丈との差は五分であります。

算術の式で表しますと以上の通りに積るのですが、用布を畳み積りに

するには、先づ全體の布を眞中から二つに折つて重ね、輪の方を右手にして、輪から計つて襠丈とムダと腰板の用尺を取り、其所へ印をつけます。其の印から前布丈と後布丈との差の二倍を加へた所へ又印をつけ、次に換腰板寸法の二分の一の所へ印をつけ、この印の所までへ左手の二枚の先を折返して來ます。すると印以下は四枚となりますから、今度は其の四枚の左端の輪を再び印まで折返して据ますと都合八枚重なる譯になります。この寸法が前布丈となるのですから、これに前布と後布丈の差を加へれば後布丈が出るのです。

前のやうに疊んで出すのはたゞ寸法を知るためですから、其の印の所へすぐ鋏を入れてはなりません。裁つ時は矢張り前號に出ました袴科で示した裁方圖の通りに裁つので、この方法は寸法を早く知るだけであります。

3 兩面物にて普通襠切違ひ裁の前丈と後丈割出し方

在尺−換腰板布−(腰板布×2)−(襠丈とムダ×2)−(後奥布切違先+襠丈+後奥布切上げ)−(前丈及び後丈の差×4)+(後布切上げ+前布切上げ)+7=前丈

前丈+(後丈と前丈の差)=後丈

右の式を疊み積りとする時は、用布の片端から先づ換腰を取り、次に腰板布と襠丈とムダとを二倍したものを取り、殘つた尺へ後の切上げと前の切上げを加へ、それに後奥布切違ひから裁落す附菱布の丈と襠丈と後奥布切上げを加へ、この寸法から後丈と前丈との差の四倍したものを引いた殘りへ、後切上げと前切上げを加へ、これを四分しますと前丈が出ます。この出た前丈へ前丈と後丈との差を加へると後丈が出るのであります。

4 同上用布にて前奥丈と前脇丈の出し方

(前丈×4)−(前奥布と同脇布との差×2)+4=前奥布丈

前奥布丈+(前奥布丈と同脇布丈との差)=前脇布丈

5 ノボセ襠の積り方

在尺－換腰板布－(腰板布×2)－(前丈と後丈の差×4)＋(後切上げと前切上げ)＋10＝前丈

(前丈×6)－(前奥布丈と同脇布丈の差×2)＋6＝前奥布丈

前奥布丈＋(前奥布丈と同脇布丈の差)＝前脇布丈

右を畳み積りにするのは、先づ在尺から換腰板布と腰板布の二倍と、前丈と後丈との差を四倍したものを引き、残りを十分しますと前丈が出ます。これに前丈と後丈の差を加へれば後丈が出るのであります。

(ゆはり)

大正九年十月十日印刷
大正九年十月十五日發行

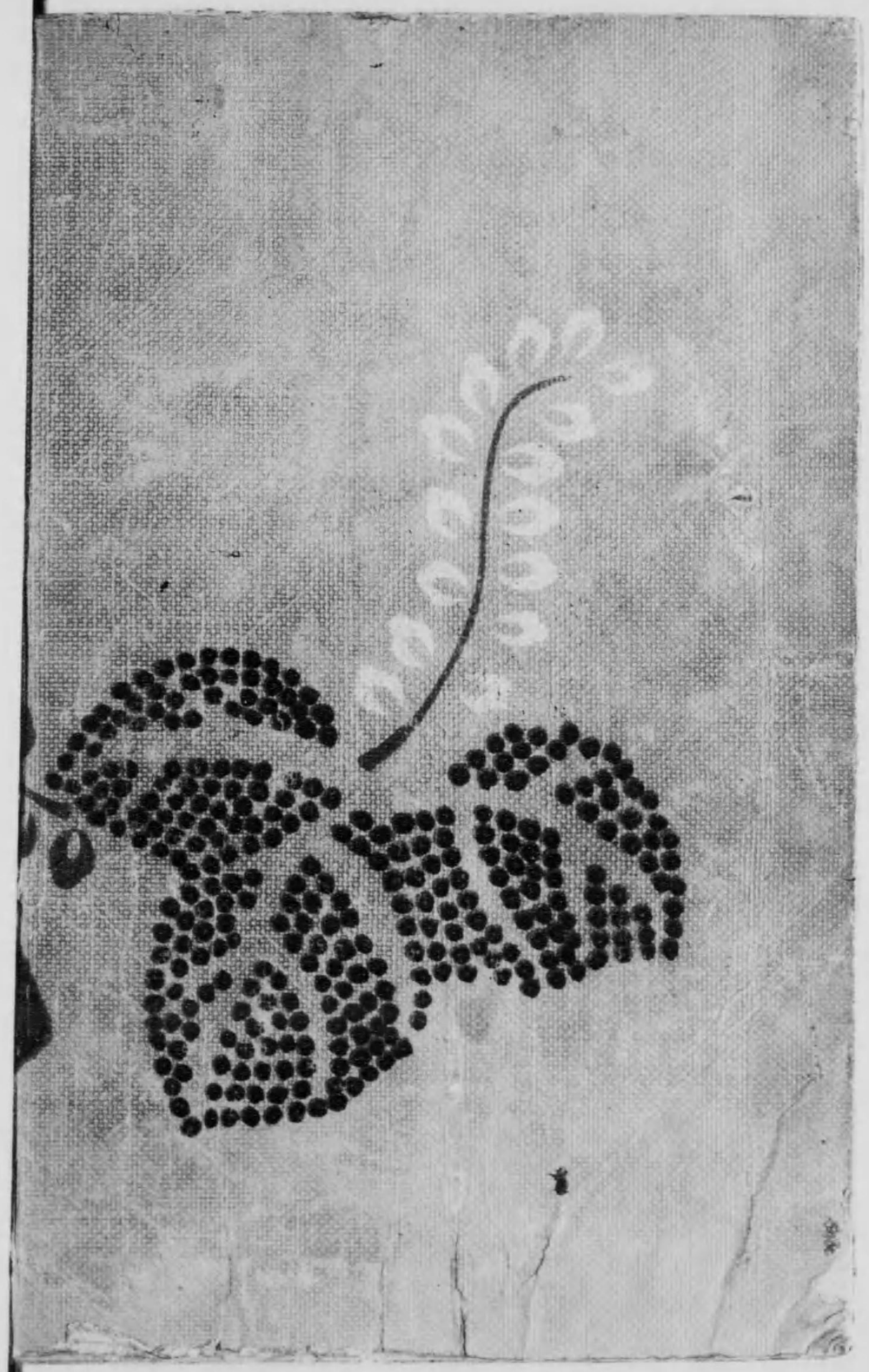
定價金壹圓八拾錢

編者　東京和服裁縫研究會

發行者　東京市神田區錦町一丁目一番地　梅津英吉

印刷者　東京市神田區小川町一番地　筒井久太郎

發行所　東京市神田區錦町壹丁目壹番地　梅津書店　振替東京三五五一〇番

不許複製

終